

河跡湖の自然



昭和63年3月

川島町ふるさと史料館



目 次

1. 河跡湖（鉄砲川）の移りかわり	2
2. 河跡湖の植物	4
1) はじめに	4
2) 植物目録	4
3) 植生図	6
4) ヤナギ	10
5) ヤナギ以外の樹木	12
6) 水生植物	13
7) 帰化植物	15
8) 在来の雑草	18
3. 河跡湖近辺の昆虫	21
1) トンボ類	21
2) 三ツ屋池のトンボ今昔	24
3) チョウ類	26
4) セミ類	32
5) キリギリス・バッタ類	33
6) アシナガバチ・スズメバチ類	35
7) 甲虫類	35
4. 河跡湖の野鳥	37
1) 鳥類目録	37
2) 野鳥の分布図	39
3) 野鳥の解説	41
①周年見られる野鳥	41
②春や秋に見られる野鳥	44
③夏に見られる野鳥	46
④冬に見られる野鳥	47
5. 昔の鉄砲川 — 住民の思い出 —	50
6. 調査（執筆）者紹介	54
7. あとがき	55

◦題字 町長 野田 知 澄 ◦表紙写真 <small>オウゴン</small> 柞下池の春
--

河跡湖（鉄砲川）の移りかわり

現在エーザイ川島工団付近から松倉町の南を経て河田町・松原町の北部を流れている鉄砲川と呼んでいる小さな流れがあります。その流れの中に、柞下池・三ツ屋池と呼ばれる2つの池があり、これを河跡湖と云われます。この河跡湖は昔の洪水の足跡ともいうべきもので当時はほぼ近い姿をとどめて今日まで残しており極めて貴重な遺跡と言えるのではないでしょうか。

ではこの鉄砲川・河跡湖はどのようにしてできたのかその歴史を探ってみましょう。“ふる里かわしま”（236頁）には、おそらく木曾川天正の大洪水（1596年）の一分派川と思われると記されています。水災誌によると天正14年6月24日の大洪水は従来の河道を一変してしまい、川島の地域でも松林寺島や水田島・ココ島をことごとく流し去ってしまった恐いものでした。水がひいてからも何らかの分派川として残り少しでも本流の水がふえると直ぐ川に変ってしまったのだらうと思われまます。

さらに川島町史（岐阜県治水史をもとにして

記述。岐阜県治水史は岐阜県水災誌と名古屋市史をもとにして記述しています。）には安政4年閏5月17-18日（1857年）の木曾川の大洪水で鉄砲水が堤防がこわれ小網村の中央に新しい川ができ観音堂塔や家々が流されたり潰れたりした。そしてこの新川を後鉄砲川という。と記されています。（川島町史通史編 249頁・1368頁参照）

これは天正の洪水で一分派川になっていたところへ安政の洪水で鉄砲水が流れこみ堤防が切れ新しい川の様相に変わってしまったものと考えられます。川島町史料編 854～855頁小網村有來覚書記（小網町刈谷美代子家所蔵）にも詳しく記されています。

こうしてできた鉄砲川や河跡湖も明治29年の前代未聞の大浸水に見舞われ、あたかも一面海のようになってしまう当時の川島村木曾川台帳に見られるような大きな被害がました。そのため以後も川巾が広くなり水量もふえ激流と変わり以来兩岸集落の往来には渡船を用いるよう



調査対象とした鉄砲川と河跡湖

になりました。そして大正の中頃までは、生活の足として石舟等の利用が盛んでした。

ところが天正10年木曾川上流改修工事が決定し、川島村付近の乱流区域を改修することに重点がおかれ、数多くの支派川を遮断して本川及び南派川・北派川の3本に限定して川の流れをよくするため、大正末期より昭和のはじめにかけて旧三斗山島と渡島西北の州をとり除いて、本川の流れをよくすると共に小さな流れや低地の埋め立て工事が行われました。この工事で鉄

砲川や河跡湖はほぼ現在と同じような様相に変わりました。（ふるさとの史跡回顧No.3三斗山島風土記参照）

この鉄砲川や河跡湖一帯は植物や昆虫・鳥・淡水魚等の宝庫になっており、又、川島の治水や歴史を学ぶ跡を留めております。この鉄砲川筋は近い将来、自然を生かした河跡湖自然公園（仮称）として整備するよう町では予定されています。



2万分の1地形図 各務原図編 明治24年大日本帝国陸地測量部

ヤマゴボウ科 ●アメリカヤマゴボウ
 ヒユ科 イノコズチ、アオビユ
 アカサ科 ●ケアリタソウ
 タデ科 イヌタデ、オオイヌタデ、●オオケタ
 デ、ミゾソバ、イシミカワ、ミズヒキ、イタ
 ドリ、ギンギシ
 イラクサ科 ヤブマオ、カラムシ
 クワ科 カナムグラ、◎クワ
 ニレ科 ◎エノキ、◎ムクノキ、◎アキニレ



三ツ屋池

ヤナギ科 ◎アカメヤナギ、◎イヌコリヤナギ、
 ◎ナガバカワヤナギ、◎コゴメヤナギ
 カンナ科 ハナカンナ (載)
 アヤメ科 ●キショウブ
 ヤマノイモ科 オニドコロ
 ユリ科 シオデ、ジャノヒゲ、ヤブラン
 イグサ科 イグサ、クサイ
 ツユクサ科 ツユクサ
 カヤツリグサ科 ヤガミスゲ、シラスゲ、サン
 カクイ、コマツカサススキ、コメガヤツリ、
 クグヤツリ

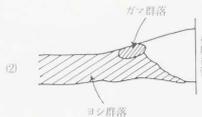
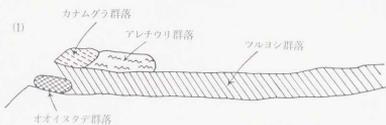
イネ科 ジュズダマ、ススキ、オギ、チガヤ、
 ウシノシッペイ、●セイバンモロコシ、シバ、
 トダシバ、●シマズメノヒエ、ヌカヒビ、
 イヌヒエ、メヒシバ、アキノエノコログサ、
 キンエノコロ、クサヨシ、ヤマアワ、オヒシ
 バ、アゼガヤ、ヨシ、ツルヨシ、●シナダレ
 スズメガヤ、チヂミザサ、カゼクサ、キツネ
 ガヤ、カモジグサ、アシカキ、メダケ、ネズ
 サ、◎ダケ (載)

ガマ科 ガマ
 マツ科 ◎クロマツ
 オシダ科 ベニシダ
 トクサ科 イヌドクサ
 イノモトソウ科 イノモトソウ
 ハナヤスリ科 フユノハナワラビ

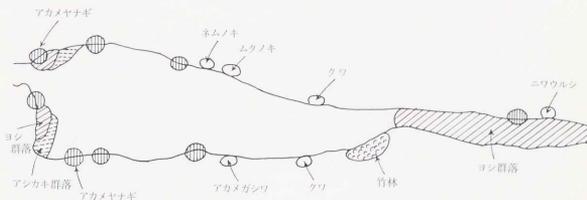
3. 植生図

河跡湖の主な場所について、図のような植生が見られた。川の中はヨシまたはツルヨシの群落が多い。ヨシは最深時の水深 150cm 程の水から水浸地まで幅広い生活圏をもち、普通水中では純群落を形成する。わんど等の水のよどんだ所や緩やかな流れの所では、ヨシマコモ群落が多く (ここではマコモは見れなかった) またカヤツリグサ類等多数の草本を含む複雑なヨシ群落をつくる。ヨシは比較的 downstream 地方に多く河口に近い塩分の多い所まで大群落をつくるが、ツルヨシは比較的 upstream 地方に多い。しかし木曾川では下流域の立田村 (河口より 17km 地点) でも見たことがある。大小の礫のある川原から細砂の貧栄養地までや、時には堤防斜面まで侵入している等、広範囲にツルヨシ群落がある。可児市の木曾川左岸や犬山市栗橋の川原には、大規模のカワラハンノキツルヨシ群落が見られる。

植生図



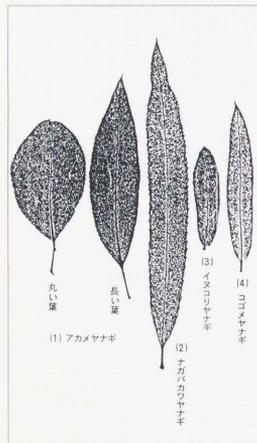
③ 三ツ屋池



4. ヤナギ

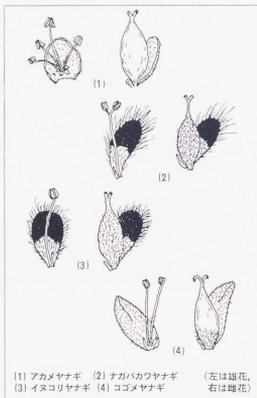
川にヤナギはつきものである。しかし河跡湖の水辺には、川原の他所に比べてヤナギは少なく、右表のように川原の12種のうち4種だけである。しかも群落はなく、伐り残されたアカメヤナギの古木が点在するにすぎない。その他では松原ひ菅の西側と柞下池の南側にナガバカワヤナギがある。また雁場橋の東側にナガバカワヤナギ、イヌコリヤナギ、コゴメヤナギが僅か見られた。ヤナギの分類は難解である。葉の時期に花がなく、早春の開花時には葉がないので一度に両者を見ることは出来ない。それに雌雄異株だから、両株の花を見る必要がある。花の

ヤナギの葉



構造は苞(花を保護する葉の一種)とおしべまたはめしべと蜜腺だけで簡単な為、種による違いが少ない。葉は発育段階で形が異なり、種による違いも微妙で変異も多い。また雑種が出きやすく、川原で見ていると何とも見当のつかない株も出て来る。しかし河跡湖のものは、はっきり同定できる。

ヤナギの花



(1) アカメヤナギ (2) ナガバカワヤナギ (3) イヌコリヤナギ (4) コメヤナギ (左は雄花、右は雌花)

(1) アカメヤナギ

別名マルバヤナギともいう。それは別の栽培種のフリソテヤナギのことを生花店でアカメヤナギというので、マルバヤナギのほうが間違わなくてよい。他種に比べれば葉の丸いものが多いが、中にはマルバでなくナガバと言いたいような葉の長いものもある。アカメヤナギは新芽が赤いからだが、他種でも赤いものはある。葉

河跡湖のヤナギの特徴比較

種	葉			花		雄花 (又は雄花と雄花同し)		樹高	その他			
	形	葉面	着方	おしべの数	めしべの数	子房の科	子房の数					
アカメヤナギ	楕円~円形	類白膜毛	互生	5~6 (4~7)	3~6	無	なし	15~20	ごく短い	2又は合して	高木	葉は山も深い
ナガバカワヤナギ	広線形	白線膜毛	互生	?	1	無	なし	12~15	短	1	10~15m	葉が最も長い
イヌコリヤナギ	狭長楕円形	類白膜毛	ほぼ対生	2 (楕円)	1	有	なし	12~15	短	1	10~15m	コリヤナギに似るが葉が立たない
コゴメヤナギ	披針形	類白膜毛	互生	2	2	有	なし	10~15	短	1	高木	水辺に葉が立たない

木曾川のヤナギの分布 (●は栽培種が野生化または外来種、++は多、+は普通、+は少)

種名	上流よりの地名												
	今	犬	草	川	北	里	東	祖	桑	給	福	弥	長
ネコヤナギ	++	++	++	++	++		+						
イヌコリヤナギ	+	++	++	++	+			+					
コリヤナギ	+												+
ナガバカワヤナギ	+	+++	+++	+++	++	+++	+++	+++	+++	+++	++	+	+
●キヌヤナギ	+			+				+	+	++	++		
○ノエヤナギ			+										
●クシユクヤナギ				+									
●ジャヤナギ			+		+				+				++
●シダレヤナギ				+									
コゴメヤナギ	+	+	+	++	+	+							
タチヤナギ			++	++	++	++			+	+	++		
アカメヤナギ	+++	+++	+++	+++	+++	+++	+++	+++	+++	+++	+++	++	++

柄に腺があり、托葉(小さい葉状の片)が目立つが、托葉は他種でも着くことがある。系統分類的には他種と縁の遠いもので、他種は冬芽の鱗片がお椀状であるが、本種は着物の襟のように左右が重なっている。おしべが4~7本あるのも特徴で、他種では1~2本である。花期は一番遅く4月下旬から5月上旬である。その為夏



アカメヤナギ

になっても雌株に果実の跡が残るものがある。托葉があるところから、学名の示種名は托葉の大きなボケの葉に似るとい語になっている。木曾川川原では本種が最も多く、中には相当の古木も見られる、河跡湖では三ツ屋池や柞下池の水辺に少数見られた。



アカメヤナギ 三ツ屋池

(2) ナガバカワヤナギ

北村四郎：原色日本植物図鑑木本編Ⅱ（保育社）その他ではカワヤナギというが、牧野図鑑（北隆館）では、別種のネコヤナギをカワヤナギと称し、北村のカワヤナギをナガバカワヤナギと呼んでいる。まぎらわしいのでカワヤナギという和名は使わず、ネコヤナギ、ナガバカワヤナギと呼ぶことにする。木曾川川原ではアカメヤナギに次いで多く、背はアカメヤナギよりやや低く4m位になる。和名通り葉は長いが、ある枝ではあまり長くないところもあり、同定に困る場合もある。しかし大部分の葉が長く、葉の両縁線が平行になるのが本種の特徴である。花期は3月下旬から4月上旬で、最も早く咲くネコヤナギよりやや遅い。花はネコヤナギに似るが、苞の先がやや丸い。

(3) イヌコリヤナギ

柳行李をつくるコリヤナギに似ているが、本種は役に立たないので、イヌコリヤナギと名付けられた。植物の和名は、サンショウとイヌザンショウ、ワラビとイヌワラビ、スギナとイ

ヌスギナ等、有用に對し無用のものにイヌとつけられたものがある。葉の着き方が他種の互生に對し、對生だからわかりやすい。しかし所々對生がずれて互生のようになる枝もあるので、1枝だけでなく全体を見なければならぬ。花はナガバカワヤナギとほぼ同時の3月下旬から4月上旬に見られ、花序もほぼ對生である。葯（花粉の入った袋）は濃紅色でよく目立ち、花粉が出てしまうと黒くなる。高さは2m前後のものも多く、川原ではあまり大きな群落はつづらない。役に立たないというが、生花用に栽培されているのを見た。

(4) コゴメヤナギ

コゴメの名は葉が小さいことによるもので、川原の12種の中では最小で長さ5cm位（3〜7cm）で細長い。樹高は割に高く5〜6mになり、川原では水辺より少し離れた所にある。ヤナギは水辺を好むが、種によって水に最も近い所か時に水中にあるもの（ネコヤナギ等）、水から少し離れた所にあるもの（コゴメヤナギ等）、川原にはなく山地にあるもの（キツネヤナギ、バッコヤナギ等）と、水に対する好みが少しづつ違っている。コゴメヤナギの和名は大垣出身マヤナギに次いで多く、背はアカメヤナギよりやや低く4m位になる。和名通り葉は長いが、ある枝ではあまり長くないところもあり、同定に困る場合もある。しかし大部分の葉が長く、葉の両縁線が平行になるのが本種の特徴である。花期は3月下旬から4月上旬で、最も早く咲くネコヤナギよりやや遅い。花はネコヤナギに似るが、苞の先がやや丸い。

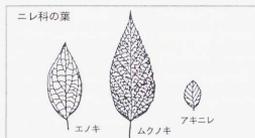
5. ヤナギ以外の樹木

木曾川川原によくある樹が、河跡湖の兩岸に見られる。目録の◎印のものも樹木で、ほとんどが落葉広葉樹である。川原で最も目立つオニグルミは見られなかった。これは上流から実が流れているもので、塩分の影響で他の樹木のな

い河口附近にさえ自生するのに、不思議と1本も見あたらない。クロマツ、ネズミモチの常緑樹も僅かであった。

(1) エノキ、ムクノキ、アキニレ

3者共ニレ科に属し、どこにでも見られるいわゆる雑木の代表者である。エノキは葉の先の方だけに鋸歯があるが、ムクノキは基部以外に鋸歯があり、葉面がざらつく。アキニレは葉が小さく葉縁全体に鋸歯をもつ。エノキ、ムクノキの実は昔の子供がおやつがわりに食べた。



(2) ヌルデ、リュウキュウハゼ、ヤマウルシ

これ等はウルシ科に属し、秋に紅葉する。川島附近にはもう一種ヤマハゼがあるが、ここには見られなかった。ヌルデは夏に白い花を沢山着けるので、雁馬橋の東等にも遠くからもよくわかる。葉は複葉で葉軸に翼がある。リュウキュウハゼはハゼノキともいい、琉球から入ってきたのでこの名がある。元来はろうを採る為に栽培されたものが野生化したものである。皮膚の弱い人はかぶれることがある。ヤマウルシは小葉が卵形で、リュウキュウハゼ、ヤマハゼより幅が広い。また果実が蓄いておれば、剛毛があるのですぐわかる。

ウルシ科4種の比較

	枝・葉の毛	葉の形	小葉の数	小葉の形	実の毛
ヌルデ	なし	あり	8〜10	卵形	剛毛あり
リュウキュウハゼ	なし	なし	8〜10	狭卵〜匙形	なし
ヤマウルシ	あり	なし	11〜17	卵〜楕円形	剛毛あり
ヤマハゼ	あり	なし	7〜10	長楕円形	なし

(3) シンジュ

ニワウルシともいうウルシ科ではなく、ニガキ科に属する落葉樹である。各所に植えられたものが川原に野生化する。葉は奇数羽状複葉で鋸歯の下面に腺点があるので、同じ複葉の②等と区別がつく。中国産の樹だが、日本の洪積層から果実の遺体が報告され、かつては我が国にもあったものである。極めて生育しやすいため河跡湖周辺でも点々と見られる。

(4) アカメガシラ

山野に多いトウダイグサ科の落葉樹で、新芽が赤いのでこの名がついた。川原でも各所に見られ、雌雄異株で7月頃よく目立つ花をつける。葉身と葉柄の境の表面に2腺点があり、葉身裏に小腺点が散在するのが、この樹の葉の特徴で、同様の形のものとの区別点となる。

6. 水生植物

ふつう水草と呼ばれているが、湿った場所に生育するものの中で広義の水生植物に含めるものもある。一般に、(イ)抽水植物、(イイ)沈水植物、(イウ)浮葉植物、(イエ)浮遊植物の4種類に分ける。(イ)は根と茎の一部が水中にあって、茎や葉の大部分が水面上に突出しているもの。(イイ)は水底に根がなくて、植物全体が水面下で生育するもの。(イウ)は水底に根や地下茎が固定しており、水面まで葉身を浮上させているもの。(イエ)は(イ)のように根や地下茎が固定されず、水面で浮遊生活をするものである。

表のように川原の他の同じ環境に比べて、河跡湖は水生植物が非常に少ない。その僅かな例をあげれば、ヨシ、ツルヨシは(イ)に、アシカキや栽培のヒツジグサは(イ)に当り、(イイ)や(イウ)は見られない。(イ)に属する帰化水草のコカナダモとオオカナダモは短期間に爆発的に増加し、濃尾平野のどの水中を見ても生育するのに、不

議と三ツ屋池にも昨下池にも見つからなかった。向に属するウキクサ、オウキクサもどこへ行ってあるのに、ここには見られない。いまや陸上の大気汚染以上に、水界における水質汚濁が極度に進み、水草の滅亡につながっているのである。

木曾川の水生植物 1987年

水生植物の種名	主な河川湖沼 を中心とする 河川湖沼の分布 状況									
	川	湖	池	沼	田	原	野	堤	岸	内
ホザキノフサモイ	○									
ヒシウ		○								
オニビシウ										○
ヒメビシウ										○
マツモイ										○
フサジュンサイ										○
エビモイ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ヤナギモイ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ホツバズヒキモウ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ササバモウ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ヘラオモダガ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
クロモイ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ヨコナダモイ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
オオカナダモイ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ホッスモイ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ヨシ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ツルヨシ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
マコモ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
アシカキ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ミズガヤツリ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
サンカクイ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
フトイ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
カンガレイ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ウキクサ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
アオウキクサ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ガマ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ヒメガマ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
シャジクモイ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

ヨシ類の比較

ヨシ類	葉の長さ	葉の幅	葉の長さ			葉の幅	葉の長さ	葉の幅	葉の長さ	葉の幅
			第1苞葉	第2苞葉	第3苞葉					
ツルヨシ	1-3	2-4	10-20	10-20	10-20	10-20	10-20	10-20	10-20	
アシカキ	2-4	2-4	10-20	10-20	10-20	10-20	10-20	10-20	10-20	
ツルヨシ	1-3	2-4	10-20	10-20	10-20	10-20	10-20	10-20	10-20	
アシカキ	2-4	2-4	10-20	10-20	10-20	10-20	10-20	10-20	10-20	

(1) ヨシ

日本は豊葦原瑞穂国といわれたが、葦の生えた湿地と豊かに稔る稲の水田がある国という意味である。アシは悪しに通じ縁起が悪いのでヨシ(良し)と呼ぶようになった。ヨシの花を細かく見ると、最下に第1苞穎、その上に第2苞穎があり、その内部に2〜4の小花がある。第1苞穎の長さが最下の小花の長さの1/2以下であることが、次のツルヨシとの相異点である。

(2) ツルヨシ

ツルという名のように地上をはう茎が見られ、その節の部分に白い長毛を密生する。ヨシより葉が幾分細いようである。第1苞穎の長さは最下の小花の1/2以上あり、花全体に対し第1苞穎が割に長い。



ツルヨシ

(3) アシカキ

池や古い水田の浅い水辺に生え、茎は横にはい上部は短く斜に立ち、夏秋にイネ科の花をつける。茎の節に毛があり、それが水田の雑草をとる人の足をひっかくので、足掻きの名がつい

た。花は一見イネのみに似ている。三ツ屋池の西側等にあった。



アシカキ

(4) サンカクイ

茎の切口が三角形だからこの名があるが、カヤツリグサ科には三角形のものが多い。木曾川川原における最も典型的な水辺群落は、岸から順に、ヤナギ、ヨシ、サンカクイの各群落の連続である。サンカクイの地下茎は太く地中を横に伸び、各節から地上茎を出している。花序は数本の枝を分け、それぞれに2〜5個の小穂が塊つて着く。木曾川ではこれによく似たものにカンガレイがある。これは小穂に鞘がなく、また長くはう地下茎がなく茎が1か所から多数出る点で、サンカクイと異なる。川原ではサンカクイより個体数が少ない。河跡湖ではカンガレイは見られなかった。



サンカクイ

(5) ガマ

因幡の白ウサギの話に出てくるガマは川原の水辺や休耕田に多い。ガマの花粉は止血作用があるので、赤痢にされたウサギを救ったのは穂綿にくるまるのではなく、花粉の上にくるがるとよいというのが本当だとの説もある。穂綿は晩秋から冬にかけて風に飛び散る綿毛をもつ果実の集まりである。ソーセージのような形の茶色の穂は雌花の集まりで、その上に細い雄花穂が着く。木曾川川原には同類のヒメガマとコガマもあるが、河跡湖ではガマ1種だけが松原ひ管の西に見られた。

7. 帰化植物

人為の影響が多い人里には、外来の帰化植物が多い。帰化を広義に解釈した場合、次の3つに分ける。

(1) 河跡湖

$$\text{帰化率} = \frac{\text{帰化植物数}}{\text{全水生植物数}} \times 100$$

前川文夫氏

調査地	市町	年月日	帰化率
河跡湖附近	川島町	1967.9.15	29.9%
トノボ池附近	笠松町	1984.8.30	17.0%
木曾川左岸川原	一宮北原	1982.9.26	34.4%
木曾川右岸川原	福生三木町	1983.10.25	22.2%
木曾川左岸砂丘	祖文江町	1982.4.15	33.8%
同上	同上	1983.8.22	25.7%
木曾川右岸ツルヨシ	福生川原町	1982.9.15	34.7%
夏秋の水田やあぜ道に見			
られ			
る雑草			
にはこれ			
に入る			
ものが多い。			
河跡湖			
にあるもの			
では、オオ			
イヌカタ			
ダ、タカサ			
プロウ、			
イヌビエ、			
カゼクサ、			
アキノノ			
ゲシ、オ			
ヒシバ			
等がこれ			
にあたと			
と推定され			

(2) 帰化植物 縄文時代までは自然の動植物を採集して食糧にしていたが、イネが到来してからは農耕の時代に入った。以後各種の作物が

日本に移入され(一部の作物はイネ以前に入るといわれる)、それについて来たものが旧帰化植物である。春開花し夏までに結実する雑草にはこれに属するものが多い。タネツケバナ、ナズナ、カタバミ、ヤムエダ等がその例である。

⑦新帰化植物 江戸時代末期から現在までに入ったもので、記録に残っているものである。⑦、⑧は記録がないので、あくまで推定のものであるが、これは確実である。江戸時代から明治の文明開化までに既にすぐれた文化が発達しており、立派な植物書も出版されていた。この書物が、狭義の帰化植物のほとんどが図示されており、これがその後に入った植物をチェックするに役立つわけである。広義の帰化植物は⑦⑧⑨を含むが、狭義の帰化植物は⑦のみをいう。ここのように帰化植物は⑦だけに限ることにする。前述の植物目録の●印のものがこれにあたる。

ある地域に帰化植物がどれ位あるか。それを目安として自然に対する人為の加わり方の程度を表わすことができる。その土地に生育する植物の全種類数に対し、帰化植物の種類数がどれだけあるかを百分率で示したものを帰化率という。河跡湖では20.9%であり5種のうち1種は帰化植物ということである。木曾三川の川原の他所に比べて、ほぼ同じかやや低い程度である。私がいままでに調べた中では、最高が名古屋市金城埠頭の41.3%、最低は瀬戸市定光寺の2.5%で、20~30%の所が多い。港は外国から荷物が輸入され、種子が着いて入って来るので一般に率が高くなる。定光寺の森のような在来の植物がスクラムを組んで固めている所には、外来者が入りこむ余地がない。森林が破壊されて裸地になると、すぐに帰化植物が侵入し率が高くなる。最近では各地の山に車道が出て、これを伝って帰化植物が登って行く。河跡湖も釣り

人等多く入り、植生の破壊と帰化率の増加が心配される。

河跡湖にある帰化植物30種の中で、キク科が最も多く12種もある。これはキク科は多くの種子を生産し、粒が細かく風に飛ばされやすく散布に都合が良いからである。例えばヒメジョオン1株の種子数は、林一六氏によれば47,000~50,000粒である。ヒメジョオン、ヒメムカシヨモギ、オオアレチノギク等はタンポポのように果実に冠毛が着いていて遠くまで飛ばすことができる。アメリカセンダングサ、コセンダングサ、コバノセンダングサでは果実に刺があり、動物体、荷物、衣服等に附着して運ばれる。

(1) センダングサ類

この類はキク科の一年生植物で、刺のある果実が衣類に付着することでよく知られている。刺に下向きな剛毛があり、それにひっかかってズボン等にささって中々取りにくい。河跡湖には次の3種が見られる。

⑦ アメリカセンダングサ どこでも見られる北米原産の帰化植物で、茎はふつう紫色をしている。花の総苞外片が大きくなって葉のように見えるので、他の2種と外見が異なる。

⑧ コセンダングサ 最近各地に多くなった。特に木曾川川原には群落をつくる。舌状花を欠くので、キク科の美しさは全くない。晩秋野外を歩くと果実が数個ずつ刺に衣類にささり、嫌な雑草である。



(例) コバノセンダングサ

小葉が細かく分裂するのでコバという名が付き、花がない時も本種とわかる。我が国には戦前から入っているが、前二者に比べると少ない。河跡湖では三ツ屋池の北側に見られる。

センダングサ類3種の比較

	葉		花		果 実	
	小 葉	着き方	舌状花	総苞片	形	刺
アメリカセンダングサ	土上3小葉下方羽状	対生	小葉で外から見えない	長くて、くみ、縁直	扁平	2本
コセンダングサ	1~1.5小葉	土上互生下方羽状	なし	短くて、羽状外片が上	縦形	1~1本
コバノセンダングサ	2羽状複葉、小葉は	土上互生下方羽状	黄色 1~1.5	短くて、縁直外片が上	縦形	1~1本



コバノセンダングサ

(2) ヒメムカシヨモギ、オオアレチノギク

両者共二年草で冬は地面にはりついたロゼット葉で越冬。人の背丈程の高さになり川原でも群落をつくる。ヒメムカシヨモギは小さいながらも舌状花がよくわかり、舌の部分は白色に見える。オオアレチノギクは舌状花はあっても舌

ヒメムカシヨモギとオオアレチノギクの比較

	ヒメムカシヨモギ	オオアレチノギク
葉と茎	葉、茎の色が暗いので、緑色が目立ちます。	白色が特徴なので、緑色が目立ちません。
花 形 (葉の裏の方)	舌の裏(縁直)に付着する。羽状花の数は多い。	舌はより長く、羽状花の数は少ない。羽状花の数はより少ない。
舌状花	舌状花の舌の部分はよくわかる。	舌状花はよく見えない。
総苞片	北 米	南 米

の部分がはっきりしない。つまり舌状花が筒状花とあまり違わないわけである。葉も微妙な違いがあり慣れれば区別は容易で、両者の中間型はない。明治初年に入ったヒメムカシヨモギは渡来後急にふえて人々の注意をひいたらしく、御維新草、明治草、鉄道草等多くの方で呼ばれた。オオアレチノギクは大正末期に牧野富太郎氏が東京で見つけたもので、両者共古い帰化植物である。

(3) ダンドボロギク、ベニバナボロギク

両者共各地でも見られる北米とアメリカ原産の帰化植物である。ダンドとは北米から日本へ入ったものが、愛知県段戸山で1931年名古屋の鈴木釘次郎氏により発見されたからである。ベニバナボロギクは花が皆下向きに垂れて咲くのが特徴で、花の上部分が赤れんが色である。二裂しためしべの先が細くて後にくるりと巻くので、ダンドボロギクとは別属にされる。ダンドボロギクは遅く戦後の1950年頃アメリカから入った。両者共観賞用のキクと違って、実にもみにくい姿で繁殖力だけ旺盛なので、ボロギクとあわれな和名がつけられている。

(4) アレチウリ

1958年北米より静岡県に帰化したものが報告された。食用のウリ類と同じ一年生する草だが、果実は食用ウリとまるで違った刺のある卵形で集団で着いており、中には1個の種子が入っている。木曾川川原で最初は食用ウリのひとり

ばえだと思っていたが、花や果実を見て本種と知った。濃尾平野では河川以外にはまだあまり見られないが、やがては進出するであろう。すでに川島町では笠田で、川原から離れた空地へ広がっている。河跡湖では本流に近い所の両岸で見られた。クズに似て他の植物をおいつくし日光をさえぎってしまう。クズがアメリカに侵入して猛威を奪っているが、逆に日本へ招かざる客が入って来たものである。種子が輸入大豆に混入し豆腐屋を中心に広がったと推定される。



アレチウリ



アレチヌスビトハギ

(5) アレチヌスビトハギ

昔は晩秋草地を歩くとズボンに付着するのはイノズチかヌスビトハギの果実であった。近年はそれがアレチヌスビトハギの果実に変って

いる。川原だけでなく道路端にも多い。在来のヌスビトハギは段々少なくなり、雁場橋南の林内に少数見られた。在来種は果実のくびれめが狭くでほとんどひとひとの点状となるが、帰化種はくびれめが広い。

(6) セイパンモロコシ

地中海沿岸地方原産のイネ科草本で、高さ80〜180 cmの大きな株になる。栽培する大きなモロコシは一年生だが、本種は多年生である。穂の出ないうちはススキに似ているが、葉縁はススキのようにざらつかない。ジョンソング セイパンモロコシラスの名で栽培されていた牧草が野生化したものである。川原や道路端に大群落をつく、夏に黄褐色の光沢ある穂を出す。根尾川の川原で栽培されているのを見た。しかし若葉に青酸化合物を含み、アメリカでは家畜の中毒例もあるという。



セイパンモロコシ

8. 在来の雑草

河跡湖の植物数

木本 (樹木)	26
限 帰化	30
在 水生	5
本 来 陸生	91
計	152

表の91種がこれで全体の約3/4にあたる。前述の史前帰化植物と旧帰化植物と推定されるものも、この中に含まれる。

(1) ススキ、オギ

両者の穂が一見似ているので間違われやすいが、オギはススキのように束になって生えず、穂の出る頃には茎の下方の葉は枯れている。水に対する好みも違い、河跡湖の水に近い所にオギ、遠い所にススキがある。オギの穂はススキよりふさふさして銀白色に見

え、ススキのような長いぎがないから慣れれば遠方からでも見分けられる。



ススキ



オギ

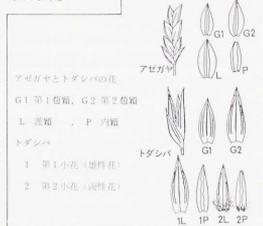
ススキとオギの比較

	地下茎	茎	小穂の形	葉の長さ	葉の幅	葉の厚さ	生育地	本邦での分布
ススキ	なし	直立	狭い	20cm以下	2mm以下	厚い	乾燥地	全国的に分布
オギ	あり	匍匐	広い	20cm以上	2mm以上	薄い	水辺	全国的に分布

(2) アゼガヤ、トダシバ

両種イネ科でその穂は一見似ているが、花の構造は全く異なる。アゼガヤは1個の花(小穂)が4〜7個の小花からなるが、トダシバでは1小穂は1個の雄性小花と1個の雌性花からなる。カラー図鑑の写真では両者の区別がつけにくい、花の細部を示す図があればすぐ区別することが出来る。アゼガヤのほうがトダシバ

よりやや湿った所に生育する。トダシバは戸田シバの意で、東京の荒川流域の戸田の原にあったのでこの名がついた。ここは、エキサイゼリ(尾張平野ではごく僅か残存)、トダグサ、ヒメアマナ、サクラソウ等貴重な野草の産地である。しかしトダシバはどこでもなる平凡な雑草である。



アゼガヤ、トダシバ

(3) チガヤ

この附近の方言ではツバナと呼び、5月頃に出る銀白色の若い穂を口にした方もあると思う。難解なイネ科の中で、本種は穂が特徴あるのすぐわかる。地下茎と若い穂には僅かな甘味があり、食した昔の子供のおやつがわりとなった。私も小学校の遠足で木曾川川原に生える地下茎を川の水で洗って、咬んだ思い出がある。菓子持参が許されなかった戦時中の遠足で、子供の間に伝わった知恵である。このことは万葉集にも詠まれている。古名を孝といひ、岡崎市内の地名である茅原沢などは、チガヤが群生している所のことであろう。

(4) ノブドウ、エビソル

河跡湖の周辺をはいまわるアウドクのつる植物として、ノブドウ、エビソル、ヤブガラシ、ツタと4種を見た。このほかに川原でよく見る

サンカヅツがあるかもしれない。ヤマブドウはやや深い山中に生え、この附近にはない。ヤブガラシとツタは葉の形からすぐわかる。ノブドウは葉の形に変異が多く、ほぼ三角形で裂けないもの、3裂するもの、深く3~5裂して裂片がさらに切れこむもの(キレハブドウ)まで色々ある。エビヅルは若枝も葉の下面も綿毛をかり白っぽい。これに対しノブドウは葉の下面は殆ど無毛で淡緑色である。エビヅルも葉の形は、浅く3裂するものから、深く5裂するものまであり、深く裂けるものを特にキクバエビヅルという。

(5) ヤガミスゲ

スゲはカヤリグサ科のうちの最大の属で、日本産だけで約250種あり、木曾川川原では今までに約20種を記録した。ナキスゲ等ごく少数のものは秋咲きだが、大部分は春咲きで5月の開花期を過ぎると種の同定はできない。しかしヤガミスゲは例外で、葉のつく様子と水辺にあることで夏以後でも本種とわかる。木曾三川とそれに続く小川には必ずといってよい位、生育する。水辺に多いので、前述の水生植物に入れる場合もある。ヤガミの意味は牧野図鑑ではどこかの地名ではないかとの考え方もあって書いてある。羽島市内の木曾川右岸の八神にも本種が多くあり、あるいはここが和名の出所ではないかと思うが、まだわからない。雁場橋附近に群生するのが見られた。

(6) アカネ

河跡湖周辺の草地には各種のつる植物が多いが、つるに逆向きの刺があり、長い柄のある葉が4枚輪生しているのが本種である。正確には4枚のうち2枚が本当の葉で、他の2枚はその托葉がくっつき合い、大きくなって葉のように見えるのである。(偽輪生という)本当の葉の柄の基部からは枝や花の着く枝が出ているが、

托葉だった葉の柄の基部からは出ていない。アカネの名は、生時には黄赤色をしており、あかね染めが出ることから、つけられた。

(7) ガガイモ

どこにでも見られるつる草で、葉は対生し茎や葉を切るると白い汁が出るのが特徴である。夏に淡紫色の側に美しい花をつける。ガガイモ科の花は他に見られない特徴があり、おしべとめしべが、くっつき合ったずいじがある。晩秋できる長さ約10cmの果実はよく目立ち、中に扁平な種子がびしり並んでいる。種子には長い毛があり、風で飛び散る。昔はこの毛は印肉に用いた。



ガガイモ

(8) フユノハラワラビ

ぶつうのシダは葉の裏に胞子葉をつけるが、本種は栄養葉と胞子葉とを別にする。つまり光合成を行うスギナと胞子をつくる専門のツクシと別になると同じである。地上部は9月から翌年3月まであり、夏は枯れる。栄養葉の根元から胞子葉を出して長く伸び、胞子葉を群生し、中に胞子をつくる。冬に葉の上に見え(胞子葉)が咲いたように見えるので、この和名がついた。三ツ屋池の周辺で見た。

河跡湖近辺の昆虫

安藤 尚

川島町の河跡湖周辺に生息する昆虫類のうち、人の目に触れやすい中~大型の種について、グループ毎に概要を述べ、代表的な昆虫について解説する。昭和62(1987)年の現地調査をもとにして記すこととする。

なお、昭和38(1963)年に三ツ屋池のトンボを調査した資料があるので、最近の調査結果との比較を付記する。

1. トンボ類

トンボ類は、幼虫(ヤゴ)が水中生活をする水と緑の深い昆虫である。5科18種の生息を確かめることができた。トンボ類は、岐阜・愛知両県からあわせて99種が記録されているので、川島町河跡湖周辺には、その18%が生息していることになる。

18種のトンボのうち、個体数が多いのはシオカラトンボとコシアケトンボであった。シオカラトンボは、成虫の出現期間も長く、水辺を離れて移動する習性が強いので、いろいろな場所で観察することができた。調査の時々に見える個体数は少ないものの、そのトンボの出現期間中、毎回観察できたのが、オオヤマトンボとギンヤンマである。ともに池から発生する種類で、三ツ屋池や柞下池の上を飛ぶのが見られた。

全調査期間を通して、次のトンボは僅かの個体しか観察できなかった。ハグロトンボ、ハラビロトンボ、オオシオカラトンボ、ミヤマアカネの4種である。ハグロトンボは清流のトンボ、ハラビロトンボは水のきれいな水生植物の多い

浅い池のトンボで、これらの種類が生息できるような場所がほとんどないためである。オオシオカラトンボとミヤマアカネは、丘陵地~低山のトンボで、川島町で見られるものは、他地域から飛来したものの可能性が大きい。

これらに次いで、

ショウジョウトンボ、

コフキトンボが少なかった。自然環境の

良好な池では、とも

に普通に見られるト

ンボである。かつて

は、マユタテアカネ

やマイコアカネなど

のアカトンボが、多

数発生したこの地域

も、現在ではマユタ

テアカネ、ナツアカ

ネ、アキアカネの3

種を産するのみとな

った。

柞下池周辺では、

昭和48(1973)年頃、

マルタンヤンマやア

オヤンマが発生し、夕

方池の上を獲りもち

これらのヤンマが飛び

かっただけであった。しかし、

今はその面影すらな

い状況となっている。

これらのことから見ると、この地域の自然環

境の悪化が、年を追って進行してきたものと考

えられる。特に雁場橋より下流の状況悪化が顕

著である。

表1 河跡湖のトンボ

イトトンボ科
(1) アジイトンボ
(2) オオモントンボ
(3) クロイトンボ
(4) セスジイトンボ
カワトンボ科
(1) ハグロトンボ
ヤンマ科
(1) ゴシヤンマ
エゾトンボ科
(1) オオヤマトンボ
トンボ科
(1) ハラビロトンボ
(2) シオカラトンボ
(3) オオシオカラトンボ
(4) ショウジョウトンボ
(5) コフキトンボ
(6) ミヤマアカネ
(7) ナツアカネ
(8) アキアカネ
(9) マユタテアカネ
(10) コシアケトンボ
(11) ウスバキトンボ
合計 18種

1) アジアイトトンボ (イトトンボ科)

体長 2.9cm内外。川島町のトンボの中では最小の種類。細身のトンボで、一見ひ弱感じがするが、生活力は旺盛である。移動力が大きく、市街地の小公園や民家の庭にも姿を見せる。体は緑色の地に黒斑がある。雌は羽化したばかりの頃は、地色が赤色をしているが、成熟するにつれて緑色になる。アオモンイトトンボに似ているが、一まわり小さいことや、雄では腹部第9節が青いことなどで区別される。平地の池沼から発生する。三ツ屋池には多い。成虫出現期は4~11月。



アジアイトトンボ

2) アオモンイトトンボ (イトトンボ科)

体長 3.3cm内外。雄の体は緑色の地に黒斑、雌は橙色の地に黒斑がある。雌に雄と同じ色や斑紋をもつものが少数現れる。アジアイトトンボに似ているが一まわり大きいこと、雄では腹部第8節が青いことなどで区別できる。平野の池沼に発生する。三ツ屋池や雁場橋周辺の草むらで観察される。成虫出現期は4~9月。



アオモンイトトンボ

3) セスジイトトンボ (イトトンボ科)

体長 3cm内外。雌の体は淡青色、雄は黄緑色で、黒斑がある。雄の腹部第8・9節には黒斑がない。平地の池沼に発生する普通種である。河跡湖では三ツ屋池に生息しているのが観察されるが、あまり多くない。成虫出現期は5~9月。



セスジイトトンボ

4) ハグロトンボ (カワトンボ科)

体長 6cm内外。雄の体は金属緑色、雌は黒褐色。はねは黒色。丘陵~平地のゆるやかな流れに生息している。若い個体は、小川を離れて遠くまで分散する習性があり、神社の森陰や民家の屋根林などで見られることもある。20年前まではごく普通の種類であったが、この頃少なくなった。河跡湖では雁場橋より上流で観察されたが、数は少ない。成虫出現期は6~9月。



ハグロトンボ

5) ギンヤンマ (ヤンマ科)

体長 7.3cm内外。体の地色は黄緑色で、褐色斑がある。腹部第3節の腹面は銀色をしている。はねは透明であるが、老熟した個体では、褐色に染まっている。上空が開けた平地の明るい池のヤンマで、濃尻平野の池にも普通の種類である。三ツ屋池や柞下池の上を飛びまわるのがしばしば観察された。雌雄連結の状態で産卵する。卵は水草の茎などに丈夫な産卵管で産み込まれる。成虫出現期は4~10月。



オオヤマトンボ

6) オオヤマトンボ (エソトンボ科)

体長 8.5cm内外。大型で頑丈なトンボ。体は緑がかった黒色の地に黄斑がある。平地~低山地の上空が開けた明るい池から発生する。成虫は池の周に沿って回って回って飛ぶ習性がある。三ツ屋池や柞下池で1~2匹が周回飛行するのが時々観察された。成虫出現期は5~9月。



シオカラトンボ

7) シオカラトンボ (トンボ科)

体長 5.2cm内外。成熟した雄の体は白粉を吹いて白い。未熟な雄や雌は変わらぬ色で、背中に2本の黒い条が走る。雌でもごく稀に雄のように白くなるものがある。平地~低山地の池沼、湿地、水田などに発生する普通の種類。水質汚濁に割合強いトンボで、昔も今もたくさん個体を見る。三ツ屋池にも多い。産卵は、雌単独で飛びながら水面に尾端を打ち付けて行う。このとき、雌の少し上空に、雌を見守る警護の雄が飛んでいることが多い。成虫出現期は4~10月。



ミヤマアカネ

9) ミヤマアカネ (トンボ科)

体長 3.5cm内外。はねに褐色の帯があるので他のトンボと容易に区別できる。若い個体の体は橙黄色をしているが、成熟するにつれて赤色に変化する。柞下池やその周辺の畑で数匹が観察されたが、このトンボは本来丘陵~低山地の水田などのゆるい流れから発生する種類で、他の地域から飛来したものかも知れない。成虫出現期は7~11月。

8) ショウジョウトンボ (トンボ科)

体長 5cm内外。羽化したばかりのものは橙黄色をしているが、成熟すると全身真赤となる。平地の池沼に普通に生息する種類であるが、今回の調査では、柞下池に僅かに生息しているのが観察されただけである。成虫出現期は5~10月。



ナツアカネ

10) ナツアカネ (トンボ科)

体長 3.7cm内外。若い間は橙黄色の体であるが、雄は成熟すると全身真赤になる。アキアカネによく似ているが、胸の横の斑紋が違ふことや、アキアカネでは雄でも体の赤化のしかたが弱いことなどで区別できる。ナツ(夏)アカネとはいっても、初冬の12月初まで生きているものがある。平地～丘陵地の水田や池沼などに発生する。成虫出現期は7～10月。

11) アキアカネ (トンボ科)

体長 4cm内外。水田や池沼に発生し、6月頃羽化する。羽化直後、池沼を離れて長距離を移動して山にのぼる。夏の間は山で生活し、秋の彼岸の頃、平野に降りる。川島町でも夏の間は観察されず、9月下旬になって見ることができた。ナツアカネに似ているが、まわり大きい。成虫出現期は6～12月。

12) コシアキトンボ (トンボ科)

体長 4.5cm内外。黒い体で、腹部第3・4節のみが白色をしている。木かげのある低地の池沼に発生する。三ツ屋池や柞下池に普通に見られる。成虫出現期は6～9月。



コシアキトンボ

13) ウスバキトンボ (トンボ科)

体長 5cm内外。体比して大きなはねをもつトンボ。体は橙黄色で、腹部背面には黒色の斑紋がある。南方系のトンボで寒さに弱く、この地方では、卵も幼虫も成虫も冬には死に絶えてしまう。したがって、この地で見えるものは、毎年南方の周年発生地から北上してきたものか、その子孫である。田圃や広場の上を夕日に赤く染まって飛ぶ習性がある。この地方での成虫出現期は7～10月。



ウスバキトンボ

2. 三ツ屋池のトンボ今昔

(24年間の変化)

かつて昭和38(1963)年5～12月に三ツ屋池のトンボの生息調査を実施したことがある。それから24年後の昭和62(1987)年6～11月に再び三ツ屋池のトンボを調査する機会をもつことができた。

この間、三ツ屋池は改修されて下手の堤が補強されたりした。池そのものの大きな構造はほとんど変わっていないが、水生植物相には可成りの変化が認められた。24年まえには、ホテイアオイやヒシなどが繁茂し、水辺にはヨシが現在以上に群生し、水中にもいろいろな植物が生育していたが、現在は水際にヨシやアシカキが少し生えているほかは、池底のヘドロのため水生植物相は極めて貧弱である。転石にも水垢がたっぷり付着して、24年前のきれいな転石とは大きな違いである。これは河跡湖に流入

する家庭雑排水の増加が影響しているものと思われる。



三ツ屋池全景

表2に、昭和38年と昭和62年の三ツ屋池のトンボの生息状況を示した。昭和62年には河跡湖全域にわたって調査を実施したが、ここでは、そのうちの三ツ屋池の分についてだけ掲げている。このときの調査は、都合で6月下旬以降に行われた。これと比較するために、昭和38年の調査分も6月中旬以前の分を省略して、6月下旬以後の分を示した。

6月下旬～12月に生息が確認されたトンボは、昭和38年が22種、昭和62年が13種で、41%の減少である。発生総量指数(+の記号の和)は、35(昭和38年)と17(昭和62年)で51%の減少がみられた。いずれも大変な減少の仕方である。24年間に姿を消した種の多くは、水のよりきれいな、水生植物のより多い水域に生息する種類である。キイトンボ、モノサシトンボ、ハラビロトンボ、マイコアカネ、キトンボ、チョウトンボなどがこれに相当する。

昭和38年には見られなかったが、今回観察されたものに、セズジイトンボがあり、発生数が増加した種に、アジイトンボ、シオカラトンボ、コシアキトンボがある。これら4種のトンボは、どちらかといえば良好とはいえない自然環境にも生育できる種類である。

表2 三ツ屋池のトンボ今昔(24年前と現在)

トンボ	昭和38(1963)	昭和62(1987)
イトトンボ科		
(1) キイトンボ	+	
(2) アジイトンボ	+	++
(3) アオモシイトンボ	+	+
(4) セズジイトンボ		+
モノサシトンボ科		
(1) モノサシトンボ	+	
ヤンマ科		
(1) カトリヤンマ	+	
(2) ボンヤンマ	+	+
エゾトンボ科		
(1) オオヤマトンボ	+	+
トンボ科		
(1) ハラビロトンボ	+++	
(2) シオカラトンボ	+	++
(3) ショウジョウトンボ	++	+
(4) コフキトンボ	+++	+
(5) ミヤマアカネ	++	
(6) ナツアカネ	++	++
(7) アキアカネ	+	+
(8) マイコアカネ	+++	
(9) ムネタチアカネ	+++	+
(10) リスアカネ	+	
(11) ノシメトンボ	+	
(12) キトンボ	+	
(13) コシアキトンボ	+	++
(14) ウスバキトンボ	++	+
(15) チョウトンボ	+++	
種 類 数	22	13
発生総量(+の数)	35	17

※ 両年とも6月下旬以後の調査分
※ + 少ない、++ 多い、+++ 非常に多い

シオカラトンボとコシアキトンボは、水質汚濁が進行した池にも生息する種類である。良好な自然環境の池では、他のトンボが生息場所を占められて、多数の個体が発生することはできないが、汚濁が進行して他のトンボが生息できなくなると、その場所をシオカラトンボなどが占有して、その分だけ多くの個体が生活できるようになるものと思われる。

24年前には、夏から秋にかけておびただしい数のマイアカネやマユタテアカネが現れ、真夏の池には、黒いはねをひらつかせて幾匹ものチョウトンボが舞っていたが、今ではその面影は全くない。

3. チョウ類

チョウは、ほとんどの種類の幼虫が植物の葉や蕾などを食べ、成虫は花の蜜や樹液、果実の汁などを吸って生活している。したがってチョウと植物とは深いつながりがあり、どのような植物が生えているかによって、生息するチョウの種類が決まってくる。

河跡湖近辺には、7科28種のチョウが分布している。岐阜・愛知両県からあわせて144種のチョウが記録されているので、河跡湖近辺にはその19%が生息していることになる。

28種のうち、樹林とその周辺を生活の本拠としているチョウは、アオスジアゲハ、クロアゲハ、コムラサキ、ゴマダラチョウ、サトキマダラヒカゲ、キマダラセセリの6種である。サトキマダラヒカゲは、比較的普通に観察することができたが、他の5種は、稀にしか見ることができなかった。コムラサキは、河辺林を構成するヤナギにつくチョウで、クロアゲハのように、うす暗い樹林内好んで生息する種類とは少し異質のチョウである。

この6種を除く22種は、草原や樹林の周辺部のような明るい環境に生活する種類である。このようなチョウは、自然環境が悪くなってもねばり強く生き残るものが多い。

樹林性のチョウは、そこに固着して生活する習性が高いが、草原性のものは、生まれた場所に執着せずに、そこを離れて移動する習性も持っているものが多い。すなわち、生まれた場所の自然環境が豊かであれば、そこに留まるものが多いが、悪ければ新天地を求めて分散してしまう。したがって、自然環境が悪化した場合、樹林性のものは絶滅する可能性が大きいが、草原性のものはどこかで生きていくことができるのである。

河跡湖の近辺、特に左岸(南)側には、樹林が残っているが、規模が小さく樹林性のチョウが安定して世代を重ねることは困難になってきていると思われる。樹林性のチョウが種類数も個体数も少ないのは、このような事情によるものと思う。

表3 河跡湖近辺のチョウ

アゲハチョウ科	
(1)	アオスジアゲハ
(2)	キアゲハ
(3)	アゲハ
(4)	クロアゲハ
シロチョウ科	
(1)	モンキチョウ
(2)	キチョウ
(3)	モンシロチョウ
シジミチョウ科	
(1)	ベニシジミ
(2)	ウラナシジミ
(3)	ヤマトシジミ
(4)	ルリシジミ
(5)	ツバメシジミ

ウラギンシジミ科	
(1)	ウラギンシジミ
タテハチョウ科	
(1)	アサマイチモンジ
(2)	コムシジ
(3)	キタテハ
(4)	ルリタテハ
(5)	ヒメアカタテハ
(6)	アカタテハ
(7)	コムラサキ
(8)	ゴマダラチョウ
ジャノメチョウ科	
(1)	ヒメウラナミジャノメ
(2)	ジャノメチョウ
(3)	サトキマダラヒカゲ
(4)	ヒメジャノメ
セセリチョウ科	
(1)	キマダラセセリ
(2)	チャバネセセリ
(3)	イチモンジセセリ
合計	28種



アゲハ

1) アゲハ(アゲハチョウ科)

春型は開張(はねを左右にひろげたときの)はねの先端から先端までの長さ)7cm内外、夏型は大きく9cm内外。体やはねは黄色の地に黒色の斑紋や条がある。幼虫は植え込みのサンショウ

ウヤカラタチ、ミカンなどの葉を食べ、年に4回発生する。蛹の状態越冬する。成虫は、タンポポ、スマレ、ヤブガラシ、ヒガンバナ、ヒョクニチソウなどの花を訪れて吸蜜する。河跡湖近辺でも普通の種類である。

2) クロアゲハ(アゲハチョウ科)

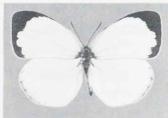
夏型は開張11cm内外。春型はやや小さい。体もはねもほとんど黒色。雄には前ばねの前後に黄白色の紋がある。幼虫は、サンショウ、ミカン、カラタチなどの葉を食べる。年3回の発生で、蛹越冬する。アゲハが明るいとこを飛びまわのるのに対して、本種は日射さない樹林内やその周辺を飛ぶ。この近辺には少ない。雁場橋周辺で少数のものが観察されただけである。

3) モンキチョウ(シロチョウ科)

開張5cm内外。雄は、はねの色が黄色、雌は、黄色と白色の2型がある。前ばねの表面外縁に広い黒色部があり、この中に数個の黄色の紋がある。後ばねの黒縁部は細い。幼虫は、ワゾゴヤシ、アカツメクサ、シロツメクサ、カラスノエンドウ、アズキなどマメ科植物を食べる。成虫は早春から晩秋までの長い期間出現し、年4回の発生と思われる。幼虫越冬する。川の堤防や人家の周辺に生息し、成虫は活発に飛び回る。河跡湖近辺には少ない。



モンキチョウ



キチョウ 上：夏型、下：秋型



モンシロチョウ



ベニシジミ



ウラナシジミ

4) キチョウ (シロチョウ科)

開張 4.5cm内外。夏に出現するものは小型である。はねは黄色で、夏型は外縁に幅広い黒縁があるが、秋型では黒縁はほとんどなくなる。幼虫は、ネムノキ、ハブ、クサネム、メドハギなどのマメ科植物を食べる。年に数回発生し、成虫で越冬する。三ツ屋池の周辺ではしばしば観察された。

5) モンシロチョウ (シロチョウ科)

開張 5 cm内外。はねの表面は白色の地に黒い紋がある。裏面は黄色味を帯びる。幼虫は、キャベツ、ハボタン、イヌガラシ、マメゲンバインズナなどの葉を食べる。蛹で越冬し、年6~7回の発生を繰り返す。越冬する時は、建物の軒下、塀、羽目板、石垣のすき間などで見出される。春は個体数が多いが、夏になると非常に少なくなり、秋に再び増える。成虫は、タンポポ、ジシバリ、ダイコン、ヒメジョオン、シロツメクサ、コスモス、セイタカアワダチソウなどいろいろな花を訪れて吸蜜する。

6) ベニシジミ (シジミチョウ科)

開張 2.8cm内外。小型赤色の美しいチョウである。赤の地色に黒斑がある。夏型は春型に比べて黒っぽい。晩秋に羽化するものは春型の色彩をしている。幼虫は、スイバ、ギシギシなどを食べる。早春から晩秋まで成虫が見られ、年数回の発生を繰り返す。幼虫で越冬する。川岸の手すりや路傍、畑地に生息する。活発に飛びまわり、アブラナ、レンゲ、オオシノブグリ、タンポポ、ヒメジョオンなどいろいろな花に集まる。

7) ウラナシジミ (シジミチョウ科)

開張 3 cm内外。はねの表面は、雄では紫藍色、雌では地色暗褐色で中央部分藍色をしている。裏面は灰白色で波状の褐色帯がある。幼虫は、フジマメ、エンドウ、インゲン、クズなどの蕾

や実を食べる。濃尾平野では、冬には寒さのため死に絶える。おそらく暖かな紀伊半島南部で越冬したものが、世代を繰り返しながら北上し、夏頃、この地に到達するものと思われる。それが基になって、夏の終わりの頃から急激に数が増えてくる。

8) ヤマトシジミ (ジミチョウ科)

開張 2.2cm内外。雄のはねの表面は青藍色、雌は黒色。裏面は白~灰白色。幼虫はカタバミを食べる。成虫は4~11月に見られ、地上低く飛び回り、カタバミなどの花を訪れる。年数回の発生を繰り返す、幼虫で越冬する。本種はカタバミの生育するところなら民家の庭、耕作地の周辺、堤防などいたるところで、その姿を見ることが出来る。

9) ウラギンシジミ (ウラギンシジミ科)

開張 4 cm内外。はねの表面は雌雄とも地色は黒褐色、雄では前ばねの中央部と後ばねの前半部に橙赤色、雌では青白色の斑紋がある。裏面は雌雄ともに銀白色。幼虫はクズやフジなどの花や実、新芽などを食べる。年3回発生し、成虫で越冬する。越冬場所は、シラカシ、ヒサカキ、ツバキなどの常緑樹の葉裏で、直接雨の掛らないところが選ばれる。越冬後の成虫が産んだ卵から、6月に1回目の成虫が羽化する。3回目は9~10月に現れる。1回目の成虫の数は少ないが、回を追うごとに多くなる。回を追うことに増加する現象は、本種のような暖地性のチョウに共通した性質である。

10) アサマイチモンジ (タテハチョウ科)

開張 5 cm内外。はねの表面の地色は黒色、裏面は茶褐色で白い紋が帯状に並んでいる。幼虫はスイカズラの葉を食べる。年3回の発生で、幼虫で越冬する。この地方では、木曽川河川敷とその周辺の疎林に多い。ここ河跡湖でも川の周辺の疎林で観察されるが、あまり多くない。



ヤマトシジミ



ウラギンシジミ



アサマイチモンジ

11) キタテハ (タテハチョウ科)

開張 5 cm内外。夏型のはねの表面は黄褐色で、黒色の斑点がある。裏面の地色はややうすく、褐色のしま模様がある。秋型は、表の地色は赤味を帯び、裏面は茶褐色である。幼虫はカナムグラを食べる。葉を齧って巣をつくり、その中に潜んでいる。年4~5回発生し、成虫で越冬する。夏型は、ヤナギ、コナラなどの樹液に集まったり、ヒメジョオン、シロツメクサなどの花を訪れる。また、動物の死体、排泄物、汚物、

アブラムシの分泌物などを吸う。秋型は、セイダカアワダチソウ、キダチコンギク、ヒヨドリバナなどで吸蜜したり、カキ、イチジクなどの腐った果実に飛来して吸汁する。

12) ヒメアカタテハ (タテハチョウ科)

開張 5.5cm内外。はねの表面は橙色に黒い斑紋。幼虫は、はなハコグサ、ヨモギ、ゴボウなどを食べる。何枚かの葉を綴り合わせたり、U字形に折り曲げて袋状の巣を造って、その中に静止している。成虫は、春～夏の間はほとんど見ないが、秋になると数が増えて目につくようになる。秋にはセイダカアワダチソウ、キダチコンギク、コスモスなどの花を訪れて吸蜜する。

13) コムラサキ (タテハチョウ科)

開張 6cm内外。はねの表面地色は黒褐色で、黄褐色の斑紋がある。雄のはねは光線の方向によって紫色に輝いて美しい。幼虫はヤナギの葉を食べる。年3回の発生で、幼虫で冬を越す。小枝の分岐点、太枝と樹幹との分岐点、樹皮のひだの部分や割れ目などに静止して越冬する。成虫は、ヤナギやコナラなどの樹液、犬の糞などの動物の排泄物に飛来して吸汁する。食樹や樹液の出ている木の周辺を敏速・軽快に飛びまわる。河跡湖周辺には少ない。三ツ屋池畔のヤナギに飛来しているのが時々観察された。

14) ゴマダラチョウ (タテハチョウ科)

開張 6cm内外。春型はやや大きい。黒地に白色の斑紋がある。幼虫はエノキの葉を食べる。年2回の発生で、幼虫で冬を越す。幼虫は、冬を前にして、樹を降り、根際や落葉中に潜り込む。散り敷いた落葉の下面に座をつくらせて仰向けに静止している。翌春冬眠からさめて樹に上る。成虫は、ヤナギ、エノキ、コナラなどの樹液を吸う。敏速活発に飛び回る習性がある。樹冠のまわりを、はねをひろげたまま羽ばたきせずに滑るように飛ぶ。もともと樹林のチョウで



キタテハ



ヒメアカタテハ



コムラサキ



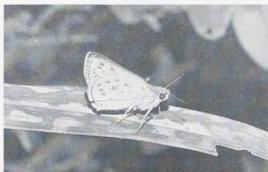
ゴマダラチョウ



ジャノメチョウ



サトキマダラヒカゲ



キマダラセリ



イチモンジセリ

あるが、生活旺盛で社寺の林や公園などに絶えることなく毎年発生している。ここでは、三ツ屋池の周辺の林にいる。

15) ジャノメチョウ (ジャノメチョウ科)

開張、雄5cm、雌は6cm内外。はねの表面は黒褐色、裏面は茶褐色で、前ばねに2個と後ばねに1個の目玉模様がある。成虫は年1回6月下旬～8月に出現する。雁場橋付近の草地に多い。明るい草原のチョウで、この場合のように平地にも産するが、どちらかといえば内陸部の低山地～山地に産地が多いチョウである。産卵方法が特異で、草の上を歩き回りながら、適当な場所であって1卵ずつ産み落とす。卵は付着性がなくて地上に転がり落ちる。幼虫で越冬する。幼虫の食餌植物はススキ、チガヤなど、成虫は各種の花の蜜や樹液を吸う。

16) サトキマダラヒカゲ (ジャノメチョウ科)

開張 6cm内外。はねは茶褐色と黄褐色の斑紋。幼虫は、メダケ、マダケ、モウソウチクなどの葉を食べる。年2回の発生で、蛹で越冬する。成虫は、ヤナギ、コナラなどの樹液、イチジク、カキなどの落果、動物の糞やミズなどの死体などに集まる。花にくることは稀。昼間はあまり活動せず、夕方に活発に飛び回る。前種ジャノメチョウが明るい草原のチョウであるのに対して、本種は、笹藪や竹林の樹林性のチョウである。ここでも河跡湖沿いの竹林をともなう雑木林にすんでいる。

17) キマダラセリ (セリチョウ科)

開張 3cm内外。はねは黒褐色と橙黄色のまだら模様。成虫は疎林の間、樹林の周辺、川の堤防、墓地のまわりなどの草地にすんでいる。敏速に飛び回り、草の上にはばねを全開、前ばねを半開きにして止まることがある。幼虫は、メダケ、マダケ、ススキ、エノコログサなどの葉を食べる。また、幼虫は、葉を巻いて筒状の果

をつくり、その中に潜んでいる。年2回の発生で、幼虫で越冬する。このとき、巣ごと地上に落下することが多い。

18) イチモンジセセリ (セセリチョウ科)

開張 3.3cm内外。はねの表は黒褐色、裏は黄褐色で白い斑紋がある。後ばねの白紋はほぼ1列に並んでいる。幼虫は、イネ、クサヨシ、エノログサ、ススキ、チガヤなどのイネ科植物を食べる。年に4回発生し、幼虫で越冬する。幼虫は数枚の葉を綴り合わせて巣をつくり、中に入っている。成虫は、6月から現れるが、この頃の個体数は少なく、秋になって多くなる。イネの害虫として知られる。

4. セミ類

セミは、幼虫で数年の地中生活を逃した後、地上に現れて成虫となる。ある種のセミが、毎年安定した状態では出現するには、それ相当長い年月、安定した自然環境が確保されなければならない。このため、セミの発生状態は、その地の自然環境の良し悪しを知る指標となる。

河跡湖周辺には、クマゼミ、アブラゼミ、ツクツクボウシの3種が生息している。アブラゼミは普通にみられるが、クマゼミ、ツクツクボウシは少ない。

1) アブラゼミ (セミ科)

全長 5.5cm内外。体は黒色で、胸背の一部は白粉でおおわれる。はねは赤褐色で、脈は黄緑色をしている。卵は木の幹や枝に産み込まれ、そのまま越冬して、翌年ふ化する。幼虫期間は5年で、産卵してから7年目に成虫となる。成虫出現期は7月中旬～9月。虫の糞えたきるような音(ジーグリジリ……)で鳴く。夕方鳴くことが多いが、集団でいるときは一日中鳴いている。



アブラゼミ

2) ツクツクボウシ (セミ科)

全長 4.5cm内外。体は黒色に緑褐色の紋がある。はねは無色透明。濃尾平野では、成虫は7月上旬～10月上旬に出現し、割合普通のセミであるが、河跡湖周辺には少ない。ツクツクオシ・ツクツクオシ……と鳴く。なまめはこの鳴き声に由来する。卵は樹皮や枯れ枝中に産み込まれる。幼虫期間は3年。



ツクツクボウシ

3) クマゼミ (セミ科)

全長 6.5cm内外。日本産セミの中では最大級の部類である。体は黒色で金色の鱗毛が密生している。はねは無色透明。セダング、サクラなどの樹に止まってシャァァァァ……と鳴く。午前中に鳴き、午後ほとんど鳴かない。平地の普通種で都市公園などにも大量に発生することがあるが、河跡湖周辺には少ない。成虫出現期は7～9月上旬。

5. キリギリス・バッタ類

キリギリスのなまめは、草原、樹林やその周辺部にすむ種類が多い。雑食性で植物だけでなく小さな昆虫なども食べる。河跡湖周辺では、ツムシ、キリギリス、ヒメギス、ホシササキリの4種の生息が確認された。ツムシは樹林周辺部にすむ種類であるが、他は草原性のものである。

バッタのなまめは、草地を主な生息場所とするものが多く、荒地に適応した生活形をとるものが多い。キリギリスのなまめは地上で生活する種類はいないが、バッタのなまめは地上生活をすものがほとんどである。ショウリウオウバッタ、トノサマバッタ、クルマバッタモドキ、イボバッタ、マダラバッタ (以上バッタ科)、オンブバッタ (オンブバッタ科)、コバネイナゴ (イナゴ科)、アオマツムシ (コオロギ科) などが生息している。

1) キリギリス (キリギリス科)

体長 4cm内外。体は緑色または淡褐色。はねは発音部は褐色で、他は緑色。日当たりのよい草原にすんでいる。雑食性で植物のほか小さな昆虫などを捕らえて食べる。幾匹ものキリギリスを一つの容器に入れて飼うと共食いをする。昼間からチョンギースと鳴く。成虫出現期は7～9月。卵で越冬する。河跡湖周辺にはあまり多くない。



キリギリス



ヒメギス

2) ヒメギス (キリギリス科)

体長 2.5cm内外。体は黒褐色で、前胸背は褐色のものとおざやかな緑色をしたものがある。前胸側に白い縁取りがある。やや濡った草地にすむ。ツルルル……と弱い声で鳴く。はねの短いものが多いが、ときに長いのはねのものもある。成虫出現期は6～8月。卵で越冬する。雁場橋周辺の草地にいる。



ショウリウオウバッタ

3) ショウリウオウバッタ (バッタ科)

体長、雄は5cm内外、雌は8cm内外で、雌雄による差が大きい。体色は緑色または淡褐色であるが、中間型のものもある。イネ科植物の生えた草地にすんでいる。雄は飛ぶときに前ばねと後ばねを打ち合わせてキチキチキチ……と音を出す。雌は発音しない。各地に普通の種類で、ここにも普通である。



クマルバツカモドキ



イボバツカ

4) クマルバツカモドキ (バツカ科)

体長3～4.5cmで、いろいろな大きさのものがいる。体や前ばねは褐色と黒褐色のまだら模様、後ばねは淡い黄色で、黒色の帯がある。背中にX字状の紋がある。川原などの荒れた草地にいる。成虫出現期は7～10月。

5) イボバツカ (バツカ科)

体長3cm内外。灰色～淡褐色で、頭や背中にいぼ状の小さい突起がある。荒地や畑などの乾いた地上にいるが、体の色が現事な保護色となつて目立たない。成虫出現期は7～10月。

6) マダラバツカ (バツカ科)

体長3cm内外。淡褐色と褐色のまだら模様の細身のバツカで、川原や荒地、堤防斜面の芝地などにいる。後ばねはうすい黄色。成虫出現期は8～10月。

7) オンプバツカ (オンプバツカ科)

体長、雄は2.5cm内外、雌は4cm内外で、雌雄による差が大きい。体や前ばねは緑か褐色、後ばねは透明で基部は淡い黄色。草地にすみ、葉の上にいることが多い。雌の上に雄がのっているところがよく見られる。オンプバツカの名はこのことによる。成虫出現期は6～11月。

8) アオマツムシ (コオロキ科)

体長2.3cm内外。緑色の美しい昆虫。コオロキのなかまであるが、樹上生活をし、地上に下りることはない。帰化昆虫で中国四川省が原産地。明治の終わり頃、東京ではじめて見つかった。都市の街路樹や公園の樹木に多い。サクラやナンキンハゼ、ウメなどに好んですむ。河跡湖近辺でもサクラにいる。高く澄んだ声でリーリーと鳴く。年に1回産卵し、卵で越冬する。卵はサクラなどの若枝に産み込まれる。成虫出現期は8月中旬～10月。



マダラバツカ



オンプバツカ



アオマツムシ

6. アシナガバチ・スズメバチ類

アシナガバチやスズメバチのなかまは、蜂や働き蜂が毒針をもっていて、人に危害を加えるので、危険な昆虫として知られている。刺されると激痛、発赤、腫脹が見られ、重症の場合には発熱、嘔吐、広範囲な浮腫などがおこる。応急手当として、ステロイド軟膏を塗布し、浮腫に対しては水で湿布するとよいという。

河跡湖近辺では、アシナガバチ類は、フタモンアシナガバチ、セグロアシナガバチ、ヤマトアシナガバチの3種、スズメバチ類では、モンズズメバチ、コガタスズメバチ、キロスズメバチが観察された。

夏になると、六角形の集合住宅型のアシナガバチのなかまの巣が、家の軒やひさしの下、あるいは庭や草地の木の枝や草の茎についているのを見るようになる。これらの巣は、春先、ただ1匹の雌バチ(女王)によって造り始められたものである。最初の子(働きバチ)が、6月の初めに羽化した後、巣はどんどん大きくなって、7月下旬になると、働きバチの数は20～30匹にもなる。盛夏の頃、新しい雌バチ(翌年の女王)と雄バチが生まれて、巣はより賑やかになる。この頃、春から産卵を続けてきた女王の寿命がつか、秋にはいると働きバチも死に絶え、新女王と雄だけとなる。霜が降りる頃には雄バチも死に絶えてしまう。残った雌バチは、建物や朽木とのすき間などに入って越冬する。

1) フタモンアシナガバチ (アシナガバチ科)

体長1.5cm内外。アシナガバチのなかまでは小型の種類。体は黒色の地に黄色の斑紋がある。第2腹節背面にはきりした1対の円紋があるので、他のアシナガバチと区別できる。秋の温暖な日、陽だまりに多数のハチが集まって飛び回ったり、垣根や庭の木の葉などの上に群れて

いるのを見ることがある。雄バチの集団である。フタモンアシナガバチは各地に普通のハチで、河跡湖近辺でもあちこちで観察される。ヤブガラシやセイタカアワダチソウなどの花に蜜を求めてきているのを見ることが多い。



フタモンアシナガバチ

2) モンズズメバチ (スズメバチ科)

体長2.5cm内外。黒色の体に赤褐色の紋がある。巣は、樹洞、人家の天井、壁の間などにつくられる。成虫はヤナギやコナラなどの樹液にくる。河跡湖近辺には少ない。



モンズズメバチ

7. 甲虫類

甲虫類は、日本におよそ9,000種が知られている。種類が多だけに、大きさや形は極めて多様である。例えば、体の大きさは、大は10cm位のものから小は0.3mm位のものまで様々である。

河跡湖周辺でも多くの甲虫が生息しているものと思われるが、ここには、それらのうちの大型のものについて述べる。

1) ノコギリクワガタ (クワガタムシ科)

体長、雄では3.5~7cm、雌では3cm内外で、雄にはいろいろ大きなものがある。角状に発達した大脚の長さや形もいろいろ変化に富んでいる。体や上翅は、黒色~赤褐色で鈍い光沢がある。成虫出現期は6~9月で、コナラやヤナギなどの樹液に集まるほか、灯火に飛来することもある。夜行性である。幼虫はこれらの朽木にすむ。卵から成虫までの期間は2~3年といわれる。河跡湖周辺にはあまり多くない。

2) ヒゲコガネ (コガネムシ科)

体長3.5cm内外。褐色の地に白色の雲状の斑紋がある。雄の触角はふさふさして大きい。川原の砂地にすみ、幼虫は土中で根を食べる。灯火に飛来する習性がある。成虫出現期は7~8月。

3) カナブン (コガネムシ科)

体長2.5cm内外。体は銅色のものから暗緑色のものまでいろいろある。成虫は7~8月頃、コナラやヤナギなどの樹液に集まる。卵は朽木の中などに産まれ、幼虫は、朽木などの腐植物を食べる。1~2年で成虫となる。

4) シラホシハナムグリ (コガネムシ科)

体長2cm内外。体は暗い銅色でやや光沢がある。上翅には多くの白斑がある。6~8月にコナラ、カシ、ヤナギ類の樹液に集まる。幼虫は朽木や腐葉土を食べて育つ。1~2年で成虫となる。

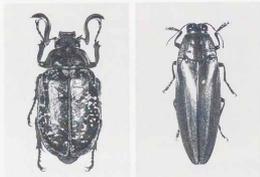
5) タマムシ (タマムシ科)

体長3~4cm。緑色で金属光沢があり、背面に紅葉色の2本の条が縦に走っている。幼虫はサクラ、ケヤキ、エノキ、カシなどの枯木の中にトンネルをつくってすんでいる。幼虫期間は

2~3年。成虫は7~8月に出現し、食樹の樹冠を飛び回る。河跡湖周辺には少ない。タマムシは、古くから吉丁虫(きっちょうむし)と呼ばれて、幸運の吉兆として愛されてきた。タマムシを繭にぐるんで小箱に入れ、簾筒の中に入れる風習があった。奈良の法隆寺にある国宝「玉虫厨子(たまむしのずし)」は、4,542匹のタマムシのはねが使われたと推定されている。



ノコギリクワガタ



ヒゲコガネ

タマムシ



シラホシハナムグリ

河跡湖の野鳥

後藤 義夫

昭和58年発行の「川島町とその周辺の野鳥」には201種の野鳥名が記載されている。その中にはもちろん河跡湖での記録も含まれているがここだけを調査したのではない。

今回、発表する河跡湖の野鳥については、昭和62年の調査が中心であるが十分なものでなく(特に期間が短かった)、過去に記録された種類も含まれた。結果、なんらかのかたちで河跡湖を利用した野鳥、生活圏としていた野鳥28科68種について、その目録、分布図、簡単な解説を述べることにする。

1. 鳥類目録

カイツブリ科

カイツブリ

サギ科

ゴイサギ、ササゴイ
チュウサギ、コサギ

ガンカモ科

カルガモ、コガモ

ワシタカ科

トビ、ツミ

キジ科

キジ、コジュケイ



キジ

クイナ科

クイナ、バン

シギ科

クサシギ、イソシギ

カモメ科

ユリカモメ、コアジサシ

ハト科

キジバト

ホトトギス科

ホトトギス

カワセミ科

カワセミ

キツツキ科

アカゲラ

ツバメ科

ツバメ、コシアカツバメ

セキレイ科

キセキレイ、ハクセキレイ、
セグロセキレイ、タビバリ



セグロセキレイ

ヒヨドリ科

ヒヨドリ

モズ科

モズ

レンジャク科

ヒレンジャク

ヒタキ科(ツグミ亜科)

ルリビタキ、ジョウビタキ、
ノビタキ、クロツグミ、
アカハラ、シロハラ、
ツグミ、



ノビタキ

ヒタキ科(ウグイス亜科)

ヤブサメ、ウグイス
コヨシキリ、オオヨシキリ、
メボソムシクイ、エゾムシクイ、
センダイムシクイ、
セッカ、



オオルリ

ヒタキ科(ヒタキ亜科)

キビタキ、オオルリ、
エゾビタキ、コサメビタキ、

エナガ科

エナガ



エナガ

シジュウカラ科

シジュウカラ

メジロ科

メジロ

ホオジロ科

ホオジロ、カシラダカ、
ノジコ、アオジ、
オオジュリン



カシラダカ

アトリ科

アトリ、カワラヒワ、
ベニマシコ、イカル、
シメ、



アトリ

ハタオリドリ科

スズメ

ムクドリ科

コムドリ、ムクドリ、

カラス科

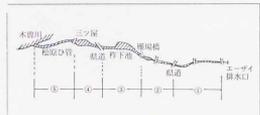
カケス、ハシボソガラス、
ハシブトガラス、



カケス

2. 野鳥の分布図

河跡湖を上流より5地域に分けて、観察できた野鳥の名を図上に記入したが、野鳥は季節によって生息場所を変えるものが多いので、観察できる時期は解説の項を参考にしたい。種名に()のあるものは今回の調査では観察できなかったが過去に記録のあるもの。



①エーザリ排水口付近～県道一宮各務原線
全域の中で自然度が最も低い地域である。川岸は改修され、建物が増え、流路周辺の自然はつぶされてしまった。以前は小規模ながら湿地があり、水生植物が生えていて、水鳥も繁殖していた。"ふる里 かわしま"にパンの親子の写真(昭和51年撮影)が載っている。ここで記録された野鳥は次の26種である。

(コサキ)、(キジ)、コジュケイ、(バン)、
キジバト、(カワセミ)、ツバメ、(キセキレイ)、
(ハクセキレイ)、セグロセキレイ、

ヒヨドリ、モズ、ジョウビタキ、ツグミ、ウグイス、(メボソムシクイ)、(キビタキ)、(エゾビタキ)、エナガ、シジュウカラ、(アオジ)、カワラヒワ、シメ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、



モズ



② 県道一宮各務原線～雁場橋
県道から中間点の小さな橋までは護岸がなされ、狭い水路を覆い隠すようにヨシなどが生え鳥影は少ないが、毎回、カワセミを見たのには驚いた。その下流より湿地が広がってヨシの群落が見られ水路も広がる。水辺の樹陰をゴイサギの群れがねぐらにしている。過去にカイツブリの繁殖記録があるが今回は姿すら見られなかった。ここでは次の42種が記録されている。



ツグミ

(カイツブリ)、ゴイサギ、ササゴイ、(カルガモ)、(ツミ)、コジュケイ、(バン)、キジバト、ホトギス、カワセミ、(アカゲラ)ツバメ、コシアカツバメ、(ハクセキレイ)、セグロセキレイ、ヒヨドリ、モズ、(ルリビタキ)、(クロツグミ)、(アカハラ)、シロハラ、ツグミ、(ヤブサメ)、ウグイス、メボソムシクイ、(エゾムシクイ)

センダイムシクイ、キビタキ、(オオルリ)、エゾビタキ、(コサメビタキ)、シジュウカラ、メジロ、アオジ、カワラヒワ、イカル、シメ、スズメ、ムクドリ、カケス、ハシボソガラス、



③ 雁場橋～県道松原芋島線(柞下池) 橋のすぐ下流には水路が見えない程のヨシの群落があり、左岸沿に県道までつづく。右岸には、サクラ、ムクノキなど樹木が並び、池にはスイレンが浮んで、鳥の鳴き声も多かったが釣人も多く、テグスやごみの投捨てが気になった。特にこの辺から生活污水の流れが目立ち川床にはヘドロが溜っている。ここでは35種が記録された。



バン

(ゴイサギ)、コジュケイ、バン、キジバト、カワセミ、(アカガラ)、ツバメ、コシアカツバメ、(セグロセキレイ)、ヒヨドリ、モズ、(ヒレンジャク)、ジョウビタキ、(クロツグミ)、(アカハラ)、(シロハラ)、ツグミ、ヤブサメ、ウグイス、(メボソムシクイ)、(エゾムシクイ)、センダイムシクイ、(キビタキ)、(オオルリ)、エゾビタキ、シジュウカラ、メジロ、アオジ、カワラヒワ、イカル、

シメ、スズメ、(コムクドリ)、ムクドリ、ハシボソガラス、



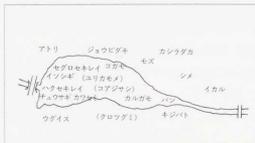
④ 県道松原芋島線～松原ひ管(三ツ屋池)

池までの水路はヨシの群落で覆われている。左岸には竹林、右岸にはネムノキ、ムクノキ、ヤナギもある。ここも柞下池同様、釣り人の出入りが多い。ここでは36種が記録された。

ゴイサギ、チュウサギ、コサギ、カルガモ、コガモ、キジ、バン、イソシギ、(ユリカモメ)、(コアザサキ)、キジバト、カワセミ、ツバメ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ジョウビタキ、(クロツグミ)、ツグミ、ウグイス、(センダイムシクイ)、シジュウカラ、メジロ、カシラダカ、アオジ、アトリ、カワラヒワ、イカル、シメ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、(ハシトガラス)



カルガモ



⑤ 松原ひ管～木曾川

全域がヨシの群落で覆われ、ガマも生えている。人の出入りが少ないこともあってか一番多く記録できた。特に冬期は小鳥が多い。ここでは46種が記録された。



イソシギ

ゴイサギ、(ササゴイ)、コサギ、コガモ、トビ、キジ、コジュケイ、(クイナ)、(バン)、クサシギ、イソシギ、ユリカモメ、コアザサキ、キジバト、カワセミ、ツバメ、キセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、タヒバリ、ヒヨドリ、モズ、ジョウビタキ、(ノビタキ)、ツグミ、ウグイス、(コヨシキリ)、(オヨシキリ)、(セッカ)、エゾビタキ、エナガ、シジュウカラ、メジロ、ホオジロ、カシラダカ、(ノジロ)、アオジ、カワラヒワ、ベニマシコ、イカル、シメ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシトガラス、



3. 野鳥の解説

野鳥は渡りを基準に、留鳥、夏鳥、冬鳥、漂鳥、旅鳥、迷鳥と6グループに区分されるが、

ここでは河跡跡で観察できる時期によって区分し解説する。

① 周年見られる野鳥(留鳥)

カイツブリ 全長約26cm。体は褐色で丸くくして尾が無いように見える。水中に潜って魚を捕える。繁殖の記録がある。



カイツブリ

ゴイサギ 全長約57.5cm。成鳥では体の上面が黒く、翼は灰色。幼鳥の体は褐色で白い斑点が多い。水辺で魚やカエルなどを捕える。



ゴイサギ

コサギ 全長約61cm。全身白く、足指が黄色。水辺で魚やカエルなどを捕える。



コサギ

カルガモ 全身約60.5cm。全身褐色で嘴の先が黄色。足はオレンジ色。水草の茎や根、タニシなどを食べる。

トビ 全長約64cm。全身黒褐色で凹尾を持った大型のタカ。弱った魚や動物の死体などを食べる。



トビ

キジ 全長約80cm。雄は頭、胸、下面は緑色光沢のある黒で顔は赤く、尾が長い。雌は全身褐色の地に黒褐色斑がある。草の種子や昆虫を食べる。

コジュケイ 全長約27cm。体の上面は褐色で黒い横斑があり、下面は赤褐色で脇には大きな黒色の三日月斑が並ぶ。植物の種子や昆虫を食べる。



コジュケイ

キジバト 全長約33cm。全身ブドウ色を帯びた灰褐色で頭側には黒と青灰色のうろこ状の斑がある。地上を歩きつつ植物質の餌を食べる。

カワセミ 全長約17cm。頭と翼は緑色。背中から尾はコバルト色。下面は橙色。水中に飛込で魚や水生昆虫を捕えて丸飲みにする。



キジバト



カワセミ

キセキレイ 全長約20cm。体の上面は青灰色。下面は黄色で尾が長い。地上や水辺を歩きつつ昆虫やクモを捕食する。



キセキレイ

セグロセキレイ 全長約21cm。体の上面は黒く眉斑は白く下面も白い。水辺を歩きつつ昆虫やクモ、時には小魚を捕食する。

ヒヨドリ 全長約27.5cm。全身灰褐色で頭上は青味が強い。木の実や昆虫をよく食べ、ツバキ、ウメ、モモなどの花の蜜を吸う。

モズ 全長約20cm。雄の頭上は橙褐色。背は青灰色。尾は黒く翼に白斑が目立つ。雌の上面は褐色で下面は淡褐色で褐色の波状横斑がある。

昆虫や小動物を食べる。



ヒヨドリ

ウグイス 全長約15cm。全身茶褐色で淡い眉斑がある。雌の方が雌より大きい。しげみの中を枝移りしながら昆虫やクモを捕食する。



ウグイス

セッカ 全長約12.5cm。体の上面は黄褐色で黒色縦斑がある。尾の先が白い。草原で昆虫やクモなどを捕食する。



セッカ

エナガ 全長約13.5cm。頭上は白く、過眼先は黒い。背は黒と紅紫色。翼と尾は黒い。下面は白く下腹は紅紫色。林内を枝移りしつつ昆虫やクモを捕食する。

メジロ 全長約11.5cm。体の上面は暗黄緑色で目の周囲が白い。下面は汚白色で脇は紫褐色。昆虫やクモを食べ。ツバキ、ウメ、サクラなどの花の蜜を吸う。



メジロ

ホオジロ 全長約16.5cm。体の上面は茶褐色で黒い縦斑があり、胸と脇も茶褐色。頬線が白い。昆虫やクモ、草の種子を食べる。



ホオジロ

カラワヒワ 全長約14.5cm。全体緑褐色で飛ぶと黄色の翼帯が目立つ。木の芽、木の実、草の種子を食べる。



カラワヒワ

スズメ 全長約14.5cm。頭は紫褐色で背は褐色で、黒い縦斑があり、翼には細い白帯が2本ある。下面は汚白色。地上で草の種や昆虫などを捕食する。



スズメ

ムクドリ 全長約24cm。全身灰黒色で腹と尾の先が白い。嘴と足が橙色。地上を歩きつつ昆虫やクモを食べ、木の実も食べる。



ムクドリ

ハシボソガラス 全長約50cm。全身紫色光沢のある黒。雑食で木の実、草の種、昆虫や死魚や小動物の死体もある。



ハシボソガラス

ハシブトガラス 全長約56.5cm。全身青色光沢のある黒。ハシボソガラスより嘴が太く、顔

が出っばっている。雑食性でなんでも食べる。



ハシブトガラス

② 春や秋に見られる野鳥(夏鳥、漂鳥、旅鳥)

ツミ 全長約30cm。雄の上面は灰黒青色。下面は白く、胸から脇は赤褐色。雌は雄より小さく、上面は灰黒色で下面は白く黒色横斑がある。林にすみ小鳥を捕える。(漂鳥)



ツミ

ホトトギス 全長約27.5cm。体の上面は青灰色。下面は白く、太くて粗い、黒色横斑がある。チョウやガ、ハチなどの幼虫を食べる(夏鳥)



ホトトギス

ノビタキ 全長約13cm。夏羽の雄では頭と顔、体の上面は黒、肩に白斑がある。下面は白く胸は橙色。雌の上面は黄褐色で黒い縦斑があり下面は淡黄褐色。昆虫を捕食する(夏鳥)

クロツグミ 全長約21.5cm。雄は腹が白い以外すべて黒で嘴と目のまわりが黄色。雌は上面茶褐色で下面は白く胸側から脇は橙黄色。昆虫やミズ、木の実を食べる(夏鳥)

ヤブサメ 全長約10.5cm。全身茶褐色であるが下面は淡い。林にすみ、昆虫やクモを捕食する。(夏鳥)

コソシキリ 全長13.5cm。体の上面はオリブ茶褐色で下面はバフ白色。白い眉斑の上に黒い縦線がある。昆虫やクモを食べる。(夏鳥)



コソシキリ

メボソシクイ 全長約13cm。体の上面オリブ緑色で下面は淡黄緑色。眉斑は白い。昆虫やクモを食べる。(夏鳥)

エゾシクイ 全長約11.5cm。体の上面は濃茶褐色で下面は汚白色。白い眉斑がある。昆虫やクモを食べる。(夏鳥)

センダイシクイ 全長約12.5cm。体の上面はオリブ緑色で白い眉斑の上は暗色。灰緑色の頭上線がある。下面は汚白色で脇は緑褐色を帯びる。昆虫やクモを食べる。(夏鳥)

キビタキ 全長約13.5cm。雄では上面は黒で眉斑と腹は黄色。翼に白斑がある。下面は黄色で喉は橙色。昆虫や木の実を食べる。(夏鳥)



キビタキ

オオルリ 全長約16.5cm。雄の上面は青、翼と尾は黒。下面は白。雌は上面は茶褐色で喉と腹は白く胸と脇は褐色。昆虫を食べる。(夏鳥)

エゾビタキ 全長約14.5cm。体の上面は灰褐色。下面は白色で黒い縦斑がある。昆虫を食べる。(旅鳥)



エゾビタキ

コサメビタキ 全長約13cm。体の上面は灰褐色。下面は白で胸に不明瞭な縦斑がある。昆虫を食べる。



コサメビタキ

ノジコ 全長約14cm。体の上面は灰緑色で黒い縦斑がある。下面は硫黄色で脇に灰緑色の縦斑がある。昆虫を食べる。(漂鳥)

コムドリ 全長約19cm。雄は白い頭赤茶色の頬、黒い背、淡橙色の腰、翼の白斑が目立つ。雌は頭と下面が灰白色。昆虫や木の実を食べる。(夏鳥)



コムドリ

③ 夏に見られる野鳥 (夏鳥)

ササゴイ 全長約52cm。頭上は黒色で背が暗青緑色。下面は淡い紫灰色。足と目が黄色。魚や水生昆虫を捕食する。



ササゴイ

チュウサギ 全長約68.5cm。全身白色。嘴は夏羽では黒く冬羽では黄色になる。魚やカエル、昆虫も食べる。



チュウサギ

バン 全長約32.5cm。全身黒く、嘴は赤く先は黄色。脇に白色斑がある。草の種、水草、昆虫を食べる。越冬することもある。

イソシギ 全長約20cm。体の上面が灰黒褐色で下面は白。飛ぶと翼に白帯がでる。昆虫やエビなどを食べる。越冬することもある。

コアジサシ 全長約28cm。頭上は黒く背は淡青灰色で尾は白い。下面も白い。水中に飛込んで魚を捕える。



コアジサシ

ツバメ 全長約17cm。体の上面は青色光沢のある黒色。下面は白く額と喉は赤褐色。飛びまわって昆虫を食べる。



ツバメ

コシアカツバメ 全長約18.5cm。体の上面は青色光沢のある黒色で腰は赤褐色。下面は淡緑灰色で黒色縦斑がある。飛びまわって昆虫を食べる。

オオヨシキリ 全長約18.5cm。体の上面はオリーフ黄褐色で下面はバフ白色。昆虫やクモを食べる。

④ 冬に見られる野鳥 (冬鳥、漂鳥)

コガモ 全長約37.5cm。雄の頭は栗色と緑。体は灰色で黒くて細かい横斑がある。草の種子や昆虫を食べる。(冬鳥)

クイナ 全長約29cm。体の上面は褐色で下面は灰色。脇腹に黒と白の横じまがある。水生昆虫やザリガニ、草の種子を食べる。(冬鳥)



クイナ

クサシギ 全長約24cm。体の上面は灰黒褐色で下面は白い。尾も白くて先端に黒斑がある。水生昆虫やクモなどを食べる。(冬鳥又は旅鳥)



クサシギ

ユリカモメ 全長約40cm。体の上面は淡青灰色。下面は白い。頭部が夏羽では黒く、冬羽では白い。魚や虫を食べる。(冬鳥)



ユリカモメ

アカガラ 全長約23.5cm。体の上面は黒く、下面は淡黄褐色。雄では頭が黒く後頭は赤い。昆虫やくもを食べる。(漂鳥)

ハクセキレイ 全長約21cm。頭上、胸、腕、尾が黒く背は夏羽では、冬羽では灰色。地上を歩きつつ昆虫やクモを食べる。(冬鳥)



アカガラ



ハクセキレイ

タヒバリ 全長約16cm。体の上面は褐色で下面は白く、胸や脇に黒色縦斑がある。昆虫やクモ、草の種子を食べる。(冬鳥)



タヒバリ

ヒレンジャク 全長約17.5cm。冠羽がある。体はぶどう褐色で額と顔に赤味があり、腹の中央が黄色く、尾の先が鮮紅色。ツゲ、ネズミモチ、ヤドリギなどの実を食べる。(冬鳥)



ヒレンジャク



ルリビタキ

ルリビタキ 全長約14cm。雄の上面は灰青色で下面是白く、脇が橙色。昆虫やクモ、木の实などを食べる。(漂鳥)

ジョウビタキ 全長約14.5cm。雄の頭は銀灰色。喉は黒。腰と体の下面是橙色。黒い翼に白斑が目立つ。昆虫やミズを食べる。(冬鳥)



ショウジョウビタキ

アカハラ 全長約23.5cm。体の上面はオリーブ褐色。胸と脇は橙褐色で腹の中央は白い。昆虫やミズ、木の实を食べる。(漂鳥)

シロハラ 全長約24.5cm。頭部は灰黒褐色で背は茶褐色。下面是淡褐色。昆虫やミズなどを食べる。(冬鳥)



シロハラ



シジュウカラ

ツグミ 全長約24cm。体の上面は黒褐色で下面是白く、黒い三角斑が並んでいる。白い眉斑が目立つ。昆虫やミズ、クモ、木の实を食べる。(冬鳥)

シジュウカラ 全長約14.5cm。頭と喉、胸から腹の中央をつなぐ線は黒く、頬は白い。活発に枝移りしながら昆虫やクモを食べる。(漂鳥)

カシラダカ 全長約14cm。体の上面は赤褐色で下面是白い。胸に褐色の帯と黒い縦斑がある。草の種子を食べる。(冬鳥)

アオジ 全長約16cm。雄の体の上面は緑灰色で背には黒い縦斑があり、翼には2本の淡色帯がある。下面是緑黄色で胸から脇に灰黒色の縦斑がある。草の種子や昆虫を食べる。(漂鳥)



アオジ

オオジュリン 全長約16cm。雄の夏羽では頭と喉の黒が目立つが、冬羽では上面が色で下面是白い。草の種子や昆虫を食べる。(冬鳥)



オオジュリン

アトリ 全長約16cm。夏羽の雄は頭の黒が目立つ。胸と肩羽が橙色。冬羽では頭部が灰色となる。木の实や草の種子を食べる。(冬鳥)

ベニマシコ 全長約15cm。雄は美しいバラ色で黒い翼に2本の白帯が目立つ。尾は黒く長い。植物の種子や小さな木の实を食べる。(冬鳥)



ベニマシコ

イカル 全長約23cm。全体灰色で大きな黄色い嘴と翼の白斑が目立つ。木の实や種子を食べる。(漂鳥)



イカル

シメ 全長約18.5cm。全体が茶色で飛ぶと翼と尾の先の白斑が目立つ。木の实や種子を食べる。(冬鳥)



シメ

カケス 全長約37cm。体はぶどう色で飛ぶと腰と翼の白が目立つ。雑食性で木の实や昆虫、クモ、カエルなどを食べる。(漂鳥)

上記の以外にここで記録されたが目録に載せなかったものの種名のみ列記する。

移動の途中たまたま上空を通過したもの23種

カウウ、アマサギ、ダイサギ、チュウサギ、アオサギ、マガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、ミサゴ、ハチクマ、オジロワシ、オオタカ、ハイタカ、ノスリ、サシバ、ハヤブサ、イカルチドリ、ケリ、タシギ、ハリオアマツバメ、アマツバメ、シヨウドウツバメ、イワツバメ、
飼鳥の籠抜けと思われるもの3種

ドバト、セキセイインコ、ワカケキンセイインコ

昔の鉄砲川・河跡湖

— 住民の思い出 —

・山内謙一さん（明治42年3月15日生）

— 松原町 250番地在住 —

わたしの子供の頃（大正時代）の鉄砲川は、ふだんは雁場池の下の方に水量が多く、その上は殆んど水がないような有様でした。

そして鉄砲川のまわりには幾つもの小さな池がありました。それで冬になると、その池の水が少なくなるのでよく“カエドリ”をしたものです。カエドリというのは池の一角をせきこめてバケツや桶で池の水を汲みだしてしまうのです。

フナやコイ・ナマズやウナギそれに白へやセンバラをバケツに2杯も3杯もつかまえたことを覚えています。当時は一寸した水溜まりにも魚はいっぱいいました。

小さな池はバケツや桶でかえましたが水が多い時や大きい池は水車を使って水をかえしたこともあります。大きくなってからは雁場池や三ツ屋池を発動機を使ってかえしたこともありました。それらの池も一たび大水になると水が溢れて皆んな鉄砲川とつながってしまいました。ある年小網の墓地が流された時など頭蓋骨が三ツ屋の方まで流れてきたこともありました。

鉄砲川の中川にヒシの実のある所もあり、ヒシの実をさがして皮をむいて生のまま食べたものでした。

川岸にはいっぱいヨシが生っていました。ヨシをかき分けてヨシキリの巣を探しにでかけました。ヨシとヨシの間に巣をつくっており、うまくいくと卵を発見皆んな喜びあったものでした。

また現在のエーザイ製菓の南の方の松林には

ゴイサギが何百羽も群をなして飛んできました。小牧山にも大集団で来たそうですが鉄砲川の南の松林のゴイサギ集団は実に壮観なもので今でも強く印象に残っています。

鉄砲川の北側は広い草地でした。現在松倉町の公民館が建っているあたりで松倉学校の運動会をやったり青年学校の查問等この広場を利用して行われたものです。

当時学校の運動会は4地区まわりもちで開かれました。三斗山島の裏の川の砂原でやったこともあり、また渡地区の時は現在建設省の水門の設けられている東側あたりで行われました。

大正の頃尾張から美濃側へ出るまでに4つの渡船にお世話になりました。笠田の裏は米野わたしと呼んで米野の人が専属で渡していました。笠田の表は笠田の人が専属で三斗山島まで渡してくれました。三斗山島と三ツ屋の間にも渡船があって三斗山の人と三ツ屋の人が一日交替で渡していました。木札に戸主名の書かれた当番板があって当番をすまずと次々と順に回っていました。河田わたしは尾張の人が渡していました。また大野わたしは松河の人達で渡していました。三ツ屋の舟着場は現在の三ツ屋龍神さまの北側あたりでした。

河跡湖には4ヶ所程木橋がありました。丸太を3本ばかりゆわえて渡してある粗末なものや中には両端に丸太をわたし横板のはってある少し広い橋もありました。



オオヨシキリ

・菊谷喜市さん（大正6年2月5日生）

— 小網町1961番地の1在住 —

わたしの祖父がよく“抜川”と呼んでいたのが現在の鉄砲川と呼ばれるものです。この抜川の南に畑を持っていましたので祖父が私を畑仕事の手伝いによく連れていきました。抜川の南の方にももう1本の川があってそれが現在の南派川なのです。

この抜川は木曾川の本来から現在の県消防学校の少し南を入口に直通で流れこんでいました。もう1ヶ所は松倉と小網島の境、小島のお宮の東から流れこんでいました。この流れは大きくてよく土手（堤防）が切れたものでした。大水の折には小島のお宮の東の切れこみが危ないので父兄が必ず学校へ子供を迎えにきてこの切れこみで子供が流されないよういっしょに連れて渡してくれたものでした。木曾川の水がふえてくると小網と笠田の者は1〜2時間の勉強で“直ぐカバンを持って帰っていけ”と先生が言われるので松倉や松河の者たちから羨ましがられ“エイヤーエイヤー”と冷やかされたものでした。

鉄砲川は現在のテニスコートの付近から急に川巾が広く小網の神社の前あたりは随分大きな流れになっていました。大水の時などは南派川の愛知県側の堤と続いてしまっ程でした。当時は木曾川の川底と村の家の建っている敷地とはほぼ同じ高さだったので少しの水でもぐ溢れて水びたしになったものでした。鉄砲川は西小網で2つに分かれ南の流れは南派川に流れこみ北の流れは現在の鉄砲川のところを流れていました。

西小網前の墓地のあたり（現在川島モーター付近）や横山組の入口付近、それから東のあたりにかけて河跡湖の池が2〜3ありました。大

きな柳の木が生えていたことを覚えていました。戦時中はこの池の周囲でイネを作って食糧増産に役立てていました。

わたしの父（明治23年生）の話では鉄砲川を石舟が上ったり下ったりしていたということですが。菊谷彰三さん（小網町2051-1番地）の工場あたりは小網の舟着き場でした。この辺に沢山の沈床が置いてあったのを覚えていました。

昭和3〜4年頃当時の内務省の工事で旧三斗山島の土砂を運んで川島薬局のあたりからエーザイ菓の運付近を通って小網の神社前まで埋立が行われました。当時わたしは小学校5年生でしたが工事に使われている蒸気機関車が珍しくよく見にいったものでした。その工事で低い所が埋められたらただでなく、さらに松倉の小島さん達のお借折りで捨てた土で堤も築いていただけなので多くの畑ができたのです。

今でも一番印象に残っているのは鉄砲川の川岸にあったハンの木のことです。子供たちは“ゾロの木”とか“ウドンの木”と呼んでいました。春先葉の出る前に花が咲きます。その花がまるとで金モールをつり下げたようにいっぱい垂れさがっていたので、そんなに呼んでいました。



ハンノキ

この木の樹皮は染料として使われていました。皮をむいて褐色に絹アミを染めているのをよく見かけたものです。現在ではハンの木もこの辺りでは見かけなくな

ってしまいました。昔は川岸にいっぱい生えていたのです。

またショウロ（松露）というキノコも周囲の松林からよく採れました。菊谷公壽さん（小網

町2146-6)の東南あたりにあった松林を“前の山”と呼んでいましたが、ここはショウロの沢山で所でした。松露はとても香りがよく松茸のおいそっくりでしたので吸い物にしたり焼いてよく食べました。また鉄砲川の水辺にはアワジョロもできました。小網へはよく県知事さんが“ショウロ狩り”に見えました。そんな時は区の役職の人達が犬騒動して見たことが再三ありました。ショウロも終戦後からだんだん生えなくなっています。現在では全く見かけなくなっています。

また当時は養蚕が盛んで桑畑がたくさんありました。桑の木の株によく“ホオジロ”の巣を見つけました。スズメによく似ている鳥で顔は黒いが頬が白いでホオジロと呼ばれていました。が「一筆啓上仕候」と鳴くというので有名でした。川岸のヨシの中には「ヨシキリ」の巣もよく見かけました。巣が多かったので臆白な男子の子をへびを捕えて尾を持って振り回し女の子を追いかけけわがらせて喜んだものでした。そのように鉄砲川や河跡湖は私たちの世代にとってはなつかしい思い出の宝庫のようなものです。



ホオジロ

・森 利彦さん(昭和7年8月19日生)

— 松倉町1663番地 —

わたしの子供の頃鉄砲川には3つの河跡湖がありました。雁橋より上の方にある池を雁場池、鉄砲川が本流へ入りこむ付近の池を三ツ屋池(山内石五郎さんの裏手があったのでイッア裏の池とも呼びました。)と言っていました。雁場池と三ツ屋池の間にあった池を柗下池と松倉では呼んでいました。池のまわりに柗の大木(ナラ・クヌギなどの総称・ハハソの訛)が生えていました。この池は河田の稲川吉五郎さんの裏手であったのでキツア裏の池とも呼んでいました。

上の雁場池には冬になると水面いっぱい氷が張りつめ、よく氷の上を滑って遊んだものです。一面に氷が張ったと言っても池のフナの方は厚いが真中の方は薄い氷でしたから、氷がひび割れて池の中にはまり首まで水につかってしまったことを覚えています。

鉄砲川には沢山の魚がいてよく釣れたものです。フナ・アマムツ・モロコ・イタセンバラ等がよく釣れました。3月から4月にかけて川の水が来てきて、そこへさしこみ水が来るとその先端をフナの群れが、それこそ水面が真っ黒になる程たまって上って来ました。わたし達はそのフナの群れを追いかけて走ったものでした。また鉄砲川の川岸の石の間にはカニがいました。石を動かしてカニを20匹近く捕えた思い出があります。

今から34年前私は消防の分団長をしていました。その時分団で柗下池の“カエドリ”をしました。大取獲で鱒カゴいっぱい魚を2~3ばいとりました。大勢の消防団員でもとても食べきれなかったので清川さん(割烹店)に買っていただいたことがありました。

現在町民会館のある付近から墓松にかけての堤防下は一面の松林が続いていました。秋になると松露というキノコが、いっぱいだったので子供たちで松露探しをしたものでした。

このように鉄砲川周辺は私達の子供の頃のかなつかしい思い出がいっぱいあります。そしてふるさと川島の昔のようすを偲ぶことができます。どうしてもこの池を町民の憩いの場として、自然をそこなわないように残したいものだと考えています。

— [3名の方のお話を記しました。] —
 文責 川島町ふるさと史料館



ショウロ

(註)

しょうろ Rhizopogon rubescens (Tul.) Tul.
 地下生、キノコは不正球形〜扁球形、径1~3(〜5)cm、表面はほぼ平滑、一部に白〜赤味をおびた菌糸束を密着し、根もとはは枝分かれた根状の菌糸束をつける、地下にあるときは白いが、地上にさらされる淡黄褐色になり、傷をつけるると紅変する;内部のグレバは不規則な迷路状に枝わかれた小さな室でみされ、はじめ白く、次第に黄色から暗褐色に変わる、子実層はこの迷路状の室の内面に発達;胞子は長楕円形、平滑、殆ど無色、9~14×3.5~4.5μ、太短い担子柄の上に4~8個つく。海岸の松林内の砂に埋まって生える、普通。分布:北半球に広く分布。

中が白いものを米松露、淡黄褐色に半熟したものを麦松露といい、共に食用にする。香りが高く吸物に用いて美味。春・秋、海岸マツ林で砂地を歩いて採集する。マツの根に菌根をつくり、マツの生長を助けるという。

〔保育社
標準原色図鑑より〕

調査（執筆）者紹介

< 植 物 >



佐藤 徳次

住 所 愛知県稲沢市島町 1150

勤務先 愛知県立稲沢東高等学校

< 昆 虫 >



安藤 尚

住 所 愛知県一宮市音羽1丁目5-24

勤務先 愛知工業大学名電高等学校

< 野 鳥 >



後藤 義夫

住 所 愛知県一宮市北方町北方字南辰己前 46-4

勤務先 木曾川町 (株)クラウンセイジユ

あとがき

川島町には、他市町村にはあまり見られない遺跡がありますが、その中の一つに昔の川の流れの跡を留める河跡湖と云われる自然が残されております。

この河跡湖は、川島町の治水の歴史と自然との関わりがもっとも深く、先人達の苦難の跡が偲ばれますし、また、動植物の繁殖地ともなっております。

こうしたことから今回は、河跡湖に生息する植物、昆虫、野鳥の実態調査を専門家の方々にお願ひし、冊子に納めました。

住民の方々に、この冊子をご一読いただき、ふるさと川島の自然愛護に深い関心を持っていただくよすがとなれば幸いと存じます。

また、この調査にご協力下さいました佐藤先生、安藤先生、後藤先生、並びに住民の皆さんに厚くお礼を申し上げます。

昭和63年3月

川島町ふるさと史料館
館長 横山 勝利

河跡湖の自然

発行日 昭和63年3月1日
発行所 川島町ふるさと史料館
所在地 岐阜県羽島郡川島町
松倉町 1951-4
TEL <058689> 2811
印刷所 浅野印刷機

